

長崎県文化財調査報告書 第86集

長崎県埋蔵文化財調査集報 X

1987

長崎県教育委員会

刊行にあたって

このたび、長崎県埋蔵文化財調査集報を刊行することになりました。

集報には、今まで県教育委員会が実施してきた調査の中で、比較的小規模な調査の結果をまとめてまいりました。現在まで24件の調査結果を収録してきましたが、今回は北松浦郡田平町にあります前目遺跡^{まへめき}、同郡江迎町の山岳遺跡^{さんがくいせき}および南高来郡有明町の一野遺跡^{ひのいせき}の調査結果を収録いたしました。

地下に包蔵されている埋蔵文化財は、できるだけ現状保存をはかり、後世に伝えていくことが文化財行政の基本であります。各種の開発事業にさきだって調査せざるをえない実態が多くなっております。本書に収録した遺跡の調査も、宅地造成や公園建設等の原因によって実施したものであります。

埋蔵文化財の調査は、できるだけ精密な観察とくわしい記録をするものであり、いわば地中にある太古の歴史情報を蒐集する作業であります。埋蔵文化財は一度壊すと元に戻すことのできないものであります。したがって、できるだけ壊さないように、壊されないように皆で考えていくことが必要があります。

これらのことを考えていくうえで、この集報が役立つことを願い、また学術研究に役立つことを願って刊行のごあいさつといたします。

昭和62年3月31日

長崎県教育長 伊藤昭六

凡 例

1. 本書は、長崎県埋蔵文化財調査集報Xである。

2. 本書には、次の各調査結果を集録した。

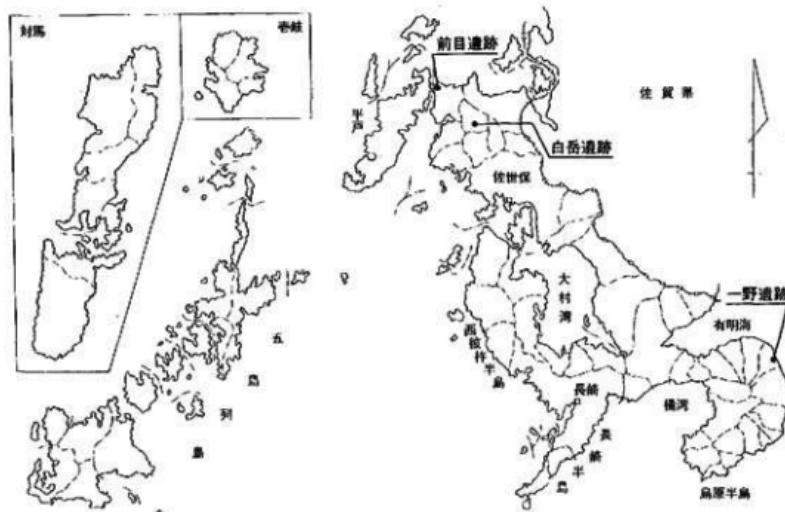
I 前日遺跡 (北松浦郡田平町)

II 白岳遺跡 (々 江迎町)

III 一野遺跡 (南高来郡有明町)

3. 本書収録の各遺跡所在地は、次のとおりである。

4. 本書の編集は、正林 護による。



第1図 本書収録の遺跡位図

総　　目　　次

I	前日遺跡	1
II	白岳遺跡	49
III	一野遺跡	83

I 前 ^{まえ} 目 ^め 遺 跡

----- 北松浦郡田平町所在 -----

例　言

一. 本書は昭和51年、52年度にかけて実施した個人宅地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

二. 調査は長崎県文化課が実施した。調査員は下記のとおりである。

一次調査（昭和52年3月1日～同月11日）

正林 譲 文化課指導主事

高野晋司 ✕ 文化財保護主事

二次調査（昭和52年5月3日～同月28日）

正林 譲 文化課指導主事

高野晋司 ✕ 文化財保護主事

宮崎貴夫 ✕ 文化財保護主事

三. 本書は分担執筆し、執筆者名は各項末尾に記した。

四. 総文作成にあたり下記の方々に助力と教示を得た。（敬称略）

川道 寛、福田一志、浦田和彦、

長嶋 徹

五. 本書掲載遺物は、現在全て長崎県文化課が保管の任に当っている。

六. 本編の編集責任は高野にある。

本文目次

1. 調査に至るまでの経過	5
2. 前日遺跡の地理的・歴史的環境	9
3. 土層	13
4. 出土土器	16
5. 出土石器	19
6. まとめ	31

挿図目次

Fig. 1 調査区配置図	7 · 8
Fig. 2 山平町内遺跡分布図	11
Fig. 3 土層図① (A区, C区, E区)	14
Fig. 4 " ② (F区, G区, H区)	15
Fig. 5 Ⅲ層出土土器 (1/2)	16
Fig. 6 Ⅳ層出土土器 (1/2)	17
Fig. 7 表土出土土器 (2/3)	20
Fig. 8 " (1/2)	21
Fig. 9 " (1/2)	22
Fig. 10 Ⅲ層出土土器 (2/3)	23
Fig. 11 " (1/2)	24
Fig. 12 Ⅳ層出土土器 (2/3)	26
Fig. 13 " (1/2)	27
Fig. 14 " (1/2)	28
Fig. 15 遺跡範囲図	31

表目次

Tab. 1 出平町内所在遺跡一覧	12
Tab. 2 出土石器計測表①	29
Tab. 3 " ②	30
Tab. 4 出土石器組成石材別一覧表	32

図版目次

PL. 1	調査区遠景・近景	35
PL. 2	F・G区調査状況 G-5,6区調査状況	36
PL. 3	F-5区北壁 G-5,6区西壁	37
PL. 4	A区北壁, E区北壁	38
PL. 5	遺物出土状況	39
PL. 6	遺物出土状況	40
PL. 7	出土土器①(1/1)	41
PL. 8	〃 ②(2/3)	42
PL. 9	出土石器①(2/3)	43
PL. 10	〃 ②(〃)	44
PL. 11	〃 ③(〃)	45
PL. 12	〃 ④(〃)	46
PL. 13	〃 ⑤(〃)	47
PL. 14	〃 ⑥(〃)	48

1. 調査に至るまでの経過

1. 第1次発掘調査

昭和51年8月、長崎県北松浦郡山平町山内免字前目632-2において、地元在住の白壁正太郎氏宅の用地基礎工事が行われ、その一隅から縄文時代の遺物が高校教諭本山昭雄氏によって発見された。このことは、田平町教育委員会を通じて長崎県文化課に急報され、同時に文化財保護法第58条5による遺跡発見届が白壁氏から提出された。現地は、平戸瀬戸に面した北松武岩台地の辺縁部に位置した緩斜面であり、前記地番一帯の畠地約1,800m²について宅地化する計画があった。白壁氏宅については、その一隅に包蔵地がかかる程度であったが、宅地化予定の全域については、地形等の観察結果からして、かなりの部分に遺跡が包蔵されるものと予察された。

翌昭和52年1月、字前目632-1において、吉永エイ子宅の宅地(323m²)の造成計画があり、同月15日基礎工事を開始したい旨の通知があり、緊急発掘調査の必要が生じた。同工事については、前年11月12日、金融公庫福岡支店(取扱は親和銀行佐世保本店)より貸付承認がなされて、日本電建が工事を担当することになっていた。金融公庫貸付による個人住宅建設については着工期限が設定されており、発掘調査に必要な期間の確保については、建主のほか、これら関係機関との間に調整が必要であった。県文化課は地元町教育委員会とも協議しつつ、3月11日を最終期限とする調査の実施について、吉永氏および日本電建・親和銀行・金融公庫と協議し、了承点に達した。調査は、文化課指導主事・正林謙、同課文化財保護主事・高野晋司の担当によって、同年3月1日~同月11日の11日間実施した。

2. 第2次調査および周辺の試掘調査

吉永エイ子氏宅建設予定地に関する前日遺跡の発掘調査(第1次調査)の直後、第1次調査地点に隣接する地点において、平戸市在住の斎藤ヨコ子氏宅の建設予定のあることが田平町教育委員会から県文化課に急報された。斎藤氏宅の敷地489.7m²に81.7m²の個人住宅を建設する、という内容のものであり、5月初旬に着手したい、というものであった。文化課は、建主である斎藤氏、工事担当者である松浦市の株式会社千北組と協議して調査期間の確保を図り、同年5月中に調査を終了することで了解を得た。

一方、斎藤氏宅は、第1次調査地点東隣の地点ではあったが、確実に包蔵地内にあるか否か不明であり、前日遺跡の範囲自体も不明確であること、これ以降においても同地番内で家屋建設の可能性が強いことから、遺跡範囲の確認調査実施の必要があった。かかる状況をふまえて調査期間を昭和52年5月3日~同月28日の26日間とし、県文化課指導主事(当時)正林謙、同文化課文化財保護主事(当事)高野晋司、同宮崎貴夫の担当で実施した。

調査は、まず斎藤ヨコ子氏宅建設予定地80m²について実施した。その結果、建設予定地の北

前目遺跡

西隅に包蔵範囲が限られることが判明した（Fig. 15E区）。

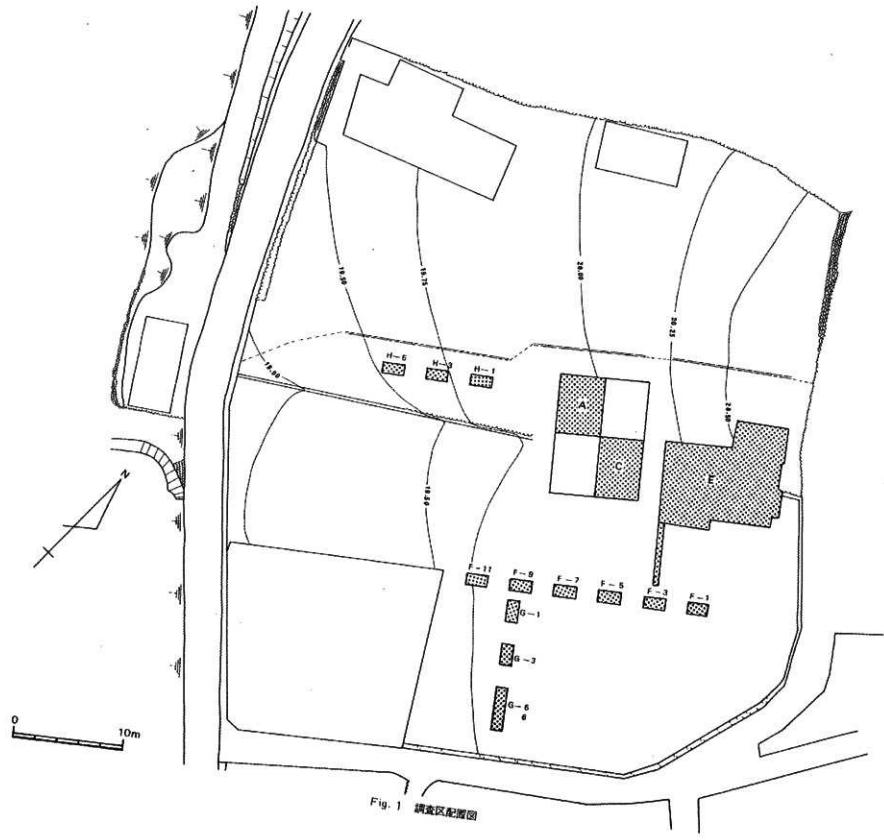
ついで、字前目 632 番地全般について、遺跡範囲を確認する調査を実施した。試掘は、同図に示したごとく、東西方向にF区（1m×22m）、H区（1m×10m）、南北方向にG区（1m×11m）、I区（0.5m×5m）のトレンチを設定し、合計28m²の試掘調査を実施した。その結果、同図に で示した内側が遺跡の包蔵範囲であることが予察可能となり、字前目 632 番地の北隣の畠干燥場敷地に包蔵地がひろがることが予察されるに至った。このことは、同地番に土地を所有している個人・田平町町長・同教育委員会等、関係者および関係機関に文書をもって通知し、以後の遺跡保全について留意を促した。

（正林）



調査風景

前目遺跡



2. 前日遺跡の地理的・歴史的環境

1. 遺跡の位置と環境

前日遺跡は、長崎県本土部の北域を占める北松浦郡田平町にあり、同町山内免 632 番地に位置している。九州島の地図をみると、西北部に平戸島（平戸市）が、九州本土からわずかに離れた海上にあり、南北に長く展開している。同島は北辺において、最も九州島に近く、わずか 1.6km の急潮を隔てて九州本土とは指呼の間にある。この急潮が平戸瀬戸であり、16世紀後半には南蛮・ポルトガル船が往来して、平戸は「西の都」と称されて殷賑をきわめたという。この平戸港の対岸にあるのが前日遺跡である、とした方が遺跡と所在町の位置の理解には便利であろう。

なお、田平町に至るには、佐世保市から鉄道またはバスを利用して 1 時間強北上する方途、福岡市方面からであれば、唐津を経由して同じく鉄道・バスで 3 時間強の方途等がある。

田平町を含む北松浦郡一帯は、佐賀県との間を、南北に走る国見山系によって隔てられ、佐賀県伊万里市と西松浦郡に接している。この北松浦郡一帯は「北松玄武岩」と称される基盤層に成立しており、田平町はその北辺に位置していて、全般に低平で最高所でも吹上山頂の 216m にすぎず、特に町の北域と西域は 30m 程度のなだらかな地形をなしている。また北松浦郡域は地下水が豊かで、しばしば地滑りをおこす原因になっているが、各地に見る湧水ともなっていて農耕を助けている。田平町の場合、国道 204 号線沿いの單出原^{さきだしはら}の一部はその典型で弥生時代の有力な遺跡が立地する一因ともなっている。一方、北松浦郡域の海岸は、沈降のくりかえしによる多島海の状況を呈し、「九十九島」の景勝を見せている。田平町の西海岸は玄武岩台地が急激に西に下降傾斜するところが多く、海岸には「日ノ浦」（平戸口桟橋付近）以外、日立った集落は発達していない。この日ノ浦地区は、対岸の平戸港とを結ぶ港として、古く「平戸口」と呼称されており、日本西端の国鉄駅とされる「ひらどぐち」の駅名もここに由来している。平戸口桟橋のある日ノ浦は、平戸港を指呼の間に望み、その間は平戸瀬戸の急潮が流れており、現今は平戸大橋で結ばれていて、雄大な景観を見ることができる。この日ノ浦以北の海岸地帯は 20m 程度の標高になっているが、海岸地形自体はハコ崎に見ることなく玄武岩台地が急傾斜をもって平戸瀬戸に沿しているところが多い。

前日遺跡のある一帯もこの玄武岩台地が急傾斜をなす辺縁に当っており、眼下に平戸瀬戸の急潮と国指定天然記念物になっている黒子島の樹叢、平戸港とその市街を一望することができる。

2. 遺跡の歴史的環境

田平町を含む北松浦郡は、西に平戸島と付近の島嶼、更に西方海上の上五島の諸島を含み、古く「魏志倭人伝」にある「末盧國」の西辺にあたることは疑いないところであろうし、「肥

「前風土記」に「松浦郡」とある地域の一角を占めていたであろう。

山平町内には、現在47ヶ所の遺跡のあることが知られている。このことは、町の面積 35.00 km²に対しても 0.7 km²に 1 箇所の割合での遺跡の存在を意味し、県内でも遺跡の存在密度の高い行政区といえる。また、遺跡内容についてみれば先土器時代以降、各期にわたって、内容的にもすぐれたものがあり、古来、人間の営みに適した地域であったことが窺われる。先土器時代の遺跡は17ヶ所を数えるが、町の西北部にある日ノ岳遺跡（Fig. 2-2）は「日ノ岳型」と称されるナイフ形石器と炉跡が検出されていて、長崎県先土器時代遺跡の一指標とされている（註2）。縄文時代の遺物を出土するのは29ヶ所を数える。これらの中で、つぐめのはな遺跡（Fig. 2-6）は、本稿の前目遺跡直下の海岸にある遺跡であるが、塞ノ神式等に伴って、巨大な鋸先状石器と鯨骨等が出土しており、鯨の採捕にかかわる遺跡とされている。弥生時代に関しては遺跡数自体は4ヶ所にすぎないが、多量の木製品の出土等で著名な里田原遺跡（Fig. 2-21）がある。同遺跡は42haにおよぶ水面下に包蔵されており、現在まで23次におよぶ調査が続行されているが、支石墓が点在し、水門等の大規模な水利遺構に伴って、農具・工具・狩猟具・葬儀具等の木製品が検出されている。これらの遺物の一部は、同町立の里田原歴史民俗資料館に展示されている。町内の古墳時代遺跡については発掘調査の事例がなく、明確な包蔵地に乏しいが、笠松神社古墳（Fig. 2-28）は全長31mの前方後円墳として知られ、同町北辺の舟崎漁港を見下す位置にある舟崎古墳も大形の前方後円墳であるらしい。奈良時代以降の田平町については中世の城跡以外に明確な遺跡に乏しいが、里田原遺跡の北辺に、県内においては数少ない布目瓦の出土地があり、今後の調査によっては、奈良時代以降における田平町の姿が里田原遺跡の条里遺構の時期とともに明らかになるかもしれない。

（正林）

（註・参考文献）

1. 長崎県教育委員会が昭和56~61年に実施した全県下の分布調査の結果による。
2. 長崎県立美術博物館「日ノ岳遺跡」1981
3. 長崎県教育委員会「つぐめのはな遺跡」長崎県文化財調査報告書第82集
4. 同上 「里田原遺跡（図録）」1972, 「里田原遺跡」略報Ⅱ 1974その他
5. 同上 「笠松神社古墳」「里田原遺跡」1976

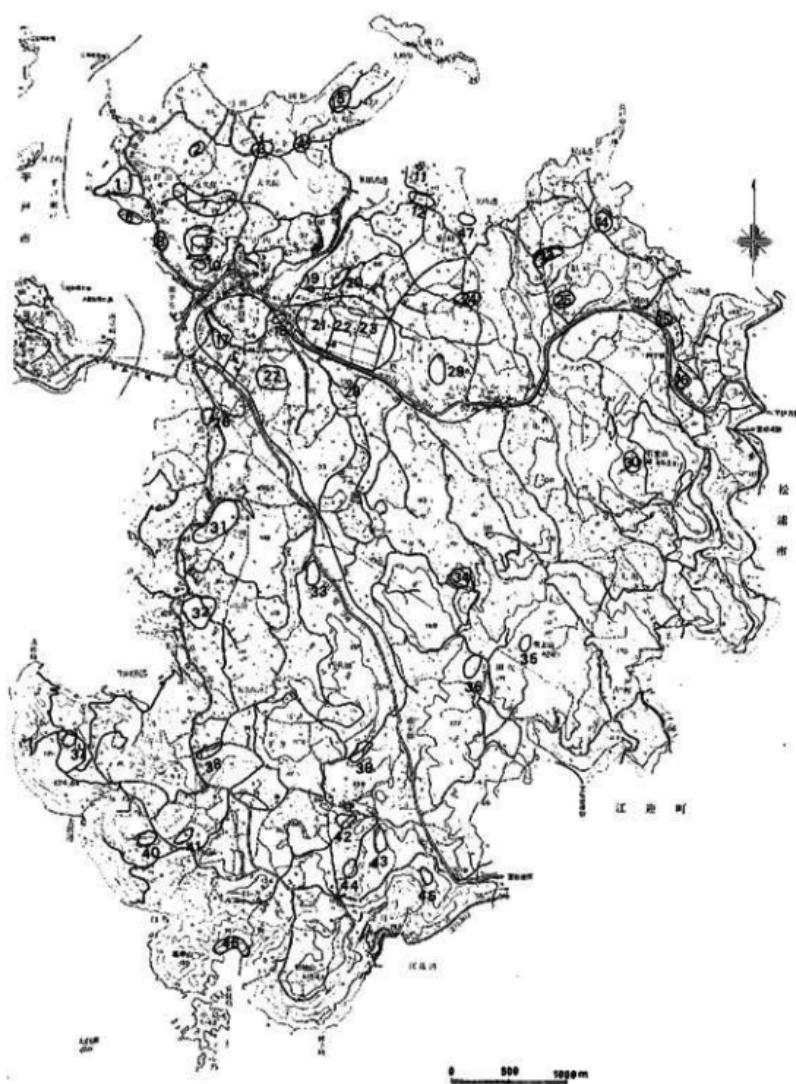


Fig.2 田平町内遺跡分布図

前田遺跡

Tab. I 田平町内所在遺跡一覧

番号	名 称	傳 別	出 土 品 等	時 代	所 在 地
1	ハエ崎遺跡	佐渡第	彌滿、石錠、石鏡、石器	備 文	野田免字ハエ崎
2	日ノ島遺跡	*	鋼石器、銅石錠、台形石器、ナイフ形石器	先 土 磬	大久保免字大連
3	中瀬遺跡	赤地	銅石錠、台形石器、ナイフ形石器	*	* 字ヤツ川・中瀬
4	永久保遺跡	*	銅石錠、石器片	備 文	* 字永久保
5	大崎みやま遺跡	*	ナイフ形石器、彌滿、石鏡	先 綱	* 字田ノ瀬・みやま
6	つぐめのはな遺跡	佐渡地	土器片、銅先端石器、石錠	備 文	野田免字ハエ崎(通称)つぐめのはな)
7	野田遺跡	数布地	台形石器、銅石錠、ナイフ形石器	先 綱	* 字上野田
8	鏡目遺跡	*	土器、銅先端石器、銅	備 文	山内免字鏡目
9	猪新田遺跡	*	石鏡、彌滿、ナイフ形石器	先 綱	* 字猪新田
10	陣立城	城 路		中 級	日の浦免字城山
11	古崎古墳	前方後円墳		古 墓	張崎免字阪削代
12	鬼崎遺跡	数布地	彌滿、石鏡、銅片	備 文	* 字鬼崎
13	茅場塗原遺跡	*	石鏡、銅片	*	福崎免字茅場
14	船崎B遺跡	*	彌滿、石鏡、銅片石器	*	* 字佐賀里
15	小崎遺跡	*	磨製石鏡、石錠、攝器	*	小崎免字辻加
16	小崎B遺跡	*	磨製石鏡、石錠、攝器	*	* 字接本
17	水田遺跡	*	磨製石錠、石錠	*	山内免字鳥場場・小手田免字水田
18	越手田城	城 路	丸丸、空瓶	中 級	* 字片南・城山
19	里崎路石塚群	路	瓦輪席、空瓶等	*	里免字中塚
20	里 城	城	丸丸、空瓶、石器	*	* 字城
21	黒田原遺跡	鬼塚地	砂袋穴、上器、須恵器、把柄鉢、磨製石錠	丹・古・金	(通称)黒田原
22	豊田原玉造構造	鬼 墓		奈 美	* ()
23	東田原玉造構造	石 墓	石器	備 紫	* ()
24	久吹遺跡	数布地	ナイフ形石器、彌滿	先 上 磬	大津方久吹
25	鶴崎A遺跡	*	ナイフ形石器、石錠、銅片	備 文	福崎免字北野細
26	鶴田遺跡	*	銅片	先 土 磬	小手田免字鶴田
27	小手田遺跡	*		備 文	* 字鶴崎・鶴傳
28	豆根神社古墳	前方後円墳		古 墓	* 字木ノ内(笠置神社地内)
29	上里遺跡	数布地		先 綱	里免字上里
30	中里遺跡	*	石鏡	備 文	小崎免字中谷
31	鶴山遺跡	*	石鏡、銅片、青銅上器	備 紫	小手田免字鶴山遺(じぎやまい)
32	丘島ヶ原遺跡	*	石鏡、銅片	先 綱	下寺免字丘島ヶ原
33	中野ノ浦遺跡	跡	ガラス玉、骨玉、刀子	井 井	野田免字中野ノ浦
34	田代A遺跡	数布地	ナイフ形石器	先 土 磬	山代免字鶴山
35	吹上右田遺跡	*	石鏡	備 文	* 字右田
36	田代B遺跡	*	台形石器	先 土 磬	* 字小高峰・久免
37	外日波遺跡	*	石鏡、銅片	備 文	下寺免字外日・堀塚・ダイワ
38	F寺遺跡	*		*	* 字中村・越首
39	萩原遺跡	*	舟底型圓石器、銅片、攝器	先 綱	萩原免字萩原
40	以善遺跡	*	ナイフ形石器、台形磨石器、銅片	先 土 磬	以善免字大善
41	白垣山遺跡	*	ナイフ形石器、石錠、銅片	*	* 字白垣山
42	南小学校遺跡	*	ナイフ形石器、石錠、銅片	先 綱	深月免字北河内
43	馬の元遺跡	*	台形標石器、ナイフ形石器、石錠	先 上 磬	* 字丸山
44	万馬遺跡	*	ナイフ形石器、銅片	*	* 字中田・大崩・中ノ辻
45	深井遺跡	*	石錠、銅片	備 文	* 字コイ首・針木津
46	以善宮遺跡	*	石器、銅片、攝器	*	以善免字宮ノ谷
47	久吹浜遺跡	鬼塚地	上器、頭芯器、石錠	備 紫	福崎免字久吹浜

3. 土層 (Fig. 3 ~ Fig. 4)

遺跡は標高20m前後、北松玄武岩台地の辺端部に在り、東から西に向かってゆるやかに傾斜する。遺跡の西側は15m程の至近距離で急角度を成して平戸瀬川に没する。

前項で記した如く、遺跡の拡がりは調査区の東半に限定される感があり、その残存面積は400m²程度かと思われる。

土層の堆積状況は、遺物包含層が認められないH区では、表土下にすぐ地山である混礫の黄褐色粘質土があらわれるが、包含層を有する区域では大略5層に分類され得る。

I、II層は表土耕作土で30~40cm程の厚みをもつ。III層は茶褐色土で玄武岩礫が混在する。20~30cm程の厚みをもつ。IV層はⅢ層よりや、暗く又粘性を持つ暗茶褐色粘質土で同じ玄武岩礫を含む。20cm~60cm程堆積する。V層は大ぶりの玄武岩礫を含む黄褐色粘質土で遺物を含まない。遺跡の東限であるE区、南限であるG-6区、及び無包含層のH区では表土下20cm程であらわれるが、最も深いF-7~F-11区では表上下150cmでもまだ確認できない。VI層は調査区域内ではE区東側部分のみにみられる混礫の赤褐色粘質土で、地元ではグミ盤と呼称している。無遺物層である。

以上の内、遺物を有する層はⅢ層、IV層に限定されるが、その色調の差は微妙で調査時での明確な識別は困難であった。

調査並びに試掘の結果、包含層の堆積状況は東西30m、南北20m程のだ円形で、最深部150cm程の半月状であることが認められる。

(高野)

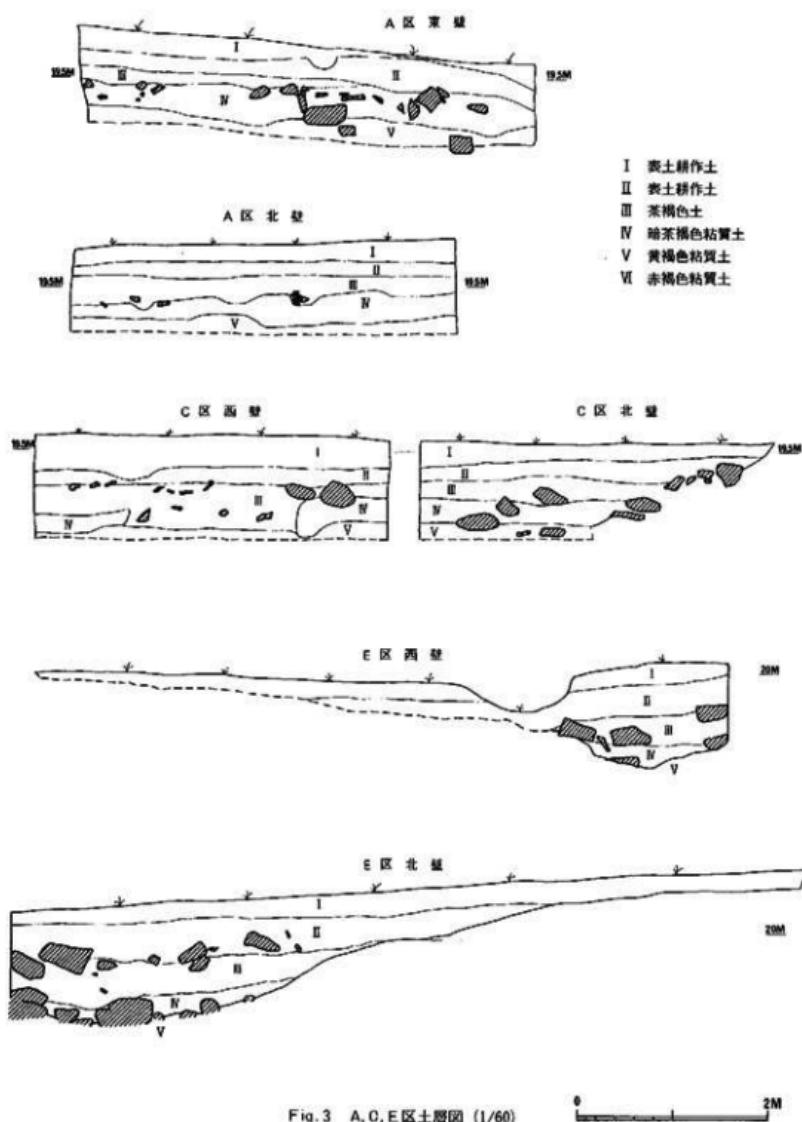


Fig. 3 A, C, E区土層図 (1/60)

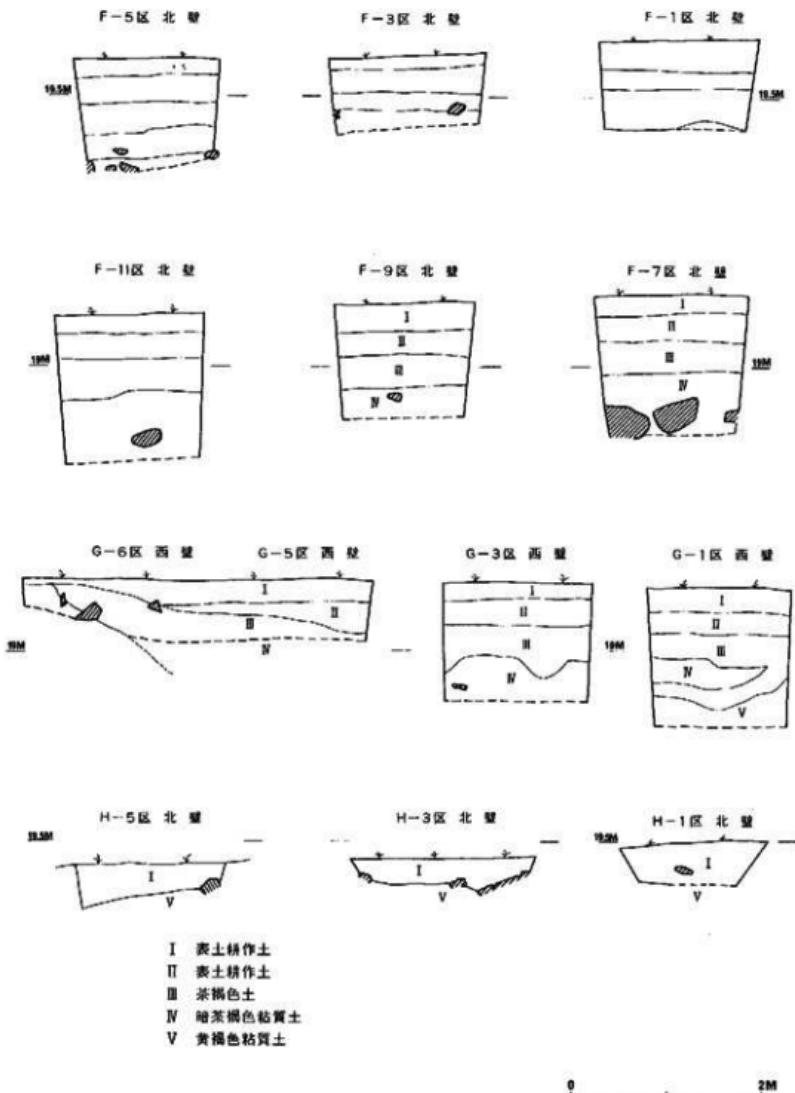


Fig. 4 土層図② (F, G, H区)

4. 出土土器 (Fig. 5, 6)

1次、2次合わせて200点程の土器片が出土したが、無文の細片が多い為に図示し得る資料に乏しく、実測可能な以下の13点のみを出土層別に紹介しておきたい。

Fig. 5-1は大型の壺底部である。C区Ⅲ層上面より一括して出土した。底径9cmを計り、底より胴部に向かって大きく内窵しながら広がる。明るい黄褐色を呈し、胎土に長石、石英粒、雲母を含む。一部に一次焼成時のススが認められる。弥生中期前半のものであろう。

2は深鉢底部である。胴部は全く欠失し円盤部のみ残存する。F5区Ⅲ層中より出土している。淡赤褐色を呈し、胎土に滑石、雲母を含む。焼成は良好である。底径は10.6cmのあげ底である。内面に指頭による押圧調整痕を残す。縄文中期以降の阿高系土器に属する。

3はE区Ⅲ層出土深鉢胴部片である。暗灰褐色を呈し、胎土に石英、長石、雲母を含む。焼成は良好である。器表面には低く巾の狭い微隆起帯を貼付し、その上に左右より交互に小巻貝による押圧を行う。裏面はヘラ磨きによる調整を施す。

4もE区Ⅲ層出土。暗茶褐色を呈し胎土に石英、長石、雲母を含む。焼成は良好で器壁は7mmの厚みを有する。器表面はヘラ磨きによる調整を施した後後、ヘラ先状原体による巾の狭い波状文を数段にわたって巡らす。類似するほぼ完形の例が長崎県国見町百花台遺跡より出土している。^(BE1)それによると、頸部がややしまり、その分だけ口縁が広がるが、その下はぼく円筒状に底部に移行する器形であるらしい。

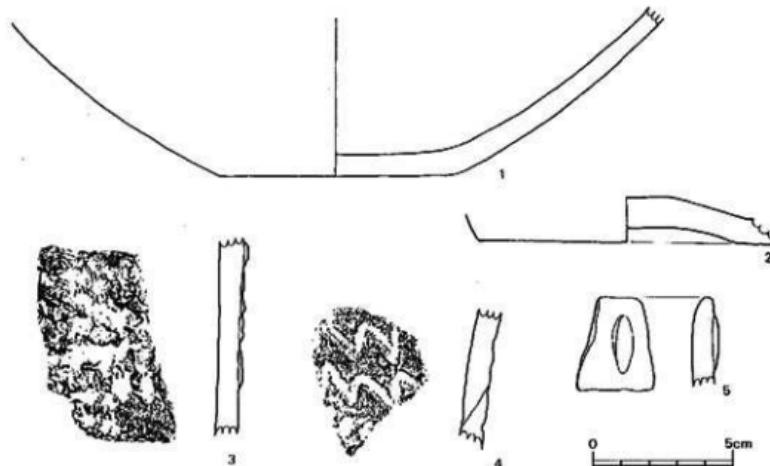


Fig. 5 Ⅲ層出土土器 (1/2)

5は小型の深鉢口縁である。茶褐色を呈する。胎土に砂粒が多いせいか表面がざらざらしている。口縁下に長さ1.7cm、巾7mm、高さ3mm程の長楕円形の豆粒状の粘土塊を縦に貼付する。小片の為詳細は不明であるが、所謂豆粒文土器とは異なるようで、隆帯の変化した例であろうと思われる。

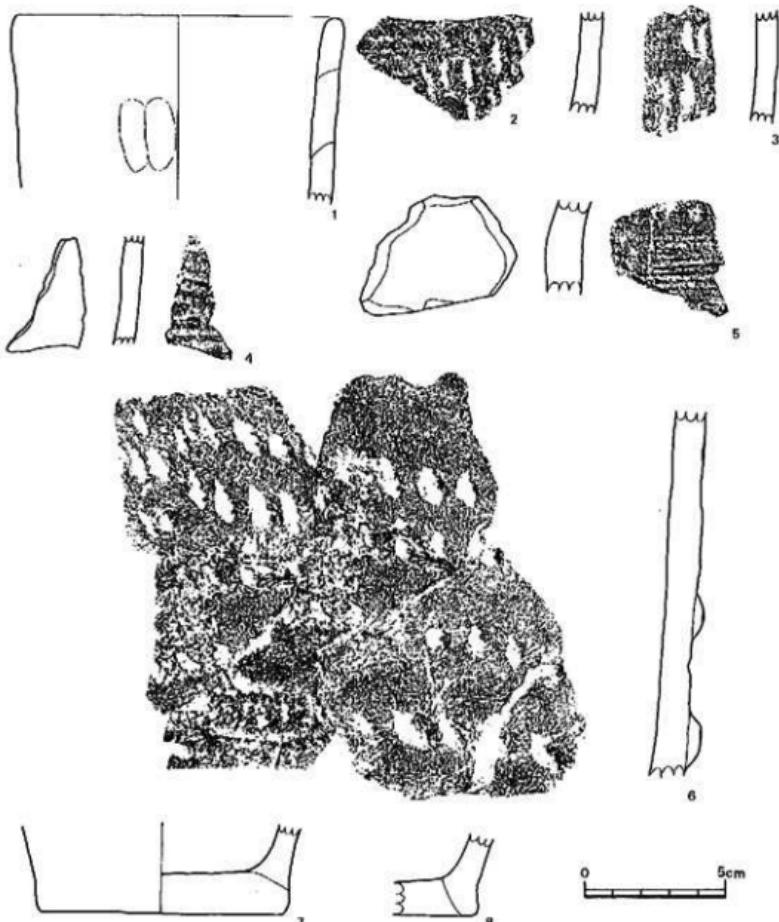


Fig. 6 層出土土器 (1/2)

3、4、5共に本県での類例は少ないが、4が塞ノ神土器に類似するところから、他の資料もほぼ同時期のものとして捉えておきたい。

IV層からは8点を紹介しておく。(Fig. 6)

1は深鉢口縁である。口径11.5cmを計る。口縁下は若干内傾しながらぼ、直線的に胴部に続く。暗茶褐色を呈し、胎土に石英粒、長石、砂粒を含む。焼成は良好である。調整はヘラによるヨコナデを行い、一部に指頭押圧痕を残す。E区IV層出土である。

2、3は同一個体と思われる深鉢胴部片である。何れも外側は黒褐色、内側は暗茶褐色を呈する。胎土には石英粒、長石、砂粒を含むが、全体的に砂っぽい。焼成は良好で厚さ7mmを計る。文様は肋脈のある2枚貝腹縁による押捺を、横方向に数段にわたって施す。何れもA区IV層よりの出土である。

4は無文の土器で13mmの器壁を有する。暗茶褐色を呈し、胎土に石英粒、長石を含む。焼成は良好であるが風化の為器表面はざらざらしている。内面は暗褐色を呈しヘラ磨きを行った後、二枚貝腹縁による貝殻条痕を施す。

5も同じ深鉢胴部片である。黒褐色を呈し、胎土に石英粒、長石を含む。器壁は6mmと薄手で、焼成は良好である。内面にはやはり横方向に貝殻条痕を施す。

6はF11区IV層最下部出土の深鉢胴部である。暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒、石英粒を含む。器壁は13mmとぶ厚い。器表は内外面共に本来はヘラ磨きによる調整を行っているが、風化によってざらざらしており脆弱である。文様は小春貝の圧痕を数段にわたって巡らすが、下方には巾1~2cm、高さ5mm程の隆帯を貼付し、その上にヘラ先状原体による浅い刻目を施す。しかし、隆帯そのものは長さ4~5cm程の小さなものと思われ器表面を巡るまでには到らない。類似に乏しい資料である。

7はC区IV層出土の深鉢底部である。復元径は8.5cmを計る。底から僅かに外傾しながらぼ直線的に胴部に移行する。暗茶褐色を呈し、胎土に石英粒、砂粒、長石を含む。焼成は良好である。

8も同じく深鉢底部である。A区IV層より出土している。明るい赤褐色を呈し、胎土に石英粒、砂粒を含む。焼成は良好で器盤内外に指頭による押圧痕が認められる。小片の為底径は不明である。

以上の資料は、2、3が近接する「つぐめの鼻遺跡」に類例があり、森式土器系統と思われるが、6はよく判らない。只時期的にはFig. 6の資料は何れも早期末~前期の範囲内に収まるものと思われる。其伴する石器の組成をみても大過は無いものと考えられる。 (高野)

(註)

1. 伴耕一郎氏教示

2. 長崎県教育委員会「つぐめの鼻遺跡」長崎県埋蔵文化財調査報告 IV 1986

5. 出土石器 (Fig. 7 ~ Fig. 14)

1次2次合わせて1,261点の石器及び石器が出土しており、その内訳はTab. 4 のとおりである。これらの資料の内ここでは67点を層位別に図示し説明を加えたい。

表 土 資 料

Fig. 7-1~8は石鎌である。1は安山岩製で完形資料である。剝離調整は雜でいびつな三角形を呈す。基部の抉りはわりあい深い。2~8は何れも黒曜石製石鎌で、2, 3, 7が完形で他はそれぞれ欠損部をもつ。9はサイドブレイドである。黒曜石製で、不定形剝片には、全周より剝離調整を行って刃部を作出する。10は形状からすると石鎌の範疇に入るが、身巾が厚く、且つ重量も他の石鎌の測定平均値の倍を有するところから石鉈としての機能を考えられる。11是有舌の石鉈である。安山岩製で両面からの調整剝離を行い、b面は平坦に、a面には鋭い稜線を残す。12は玄武岩製彫器である。縦長剝片の上端を折断し、調整剝離を施した後彫刻刃面を作出する。側縁に自然面を残す。13は石匙である。安山岩製で横剥ぎの薄手の剝片を利用し両面より丁寧な剝離を行って形状を整える。半分欠損している。14も石匙であろう。半載品でつまみ部を欠損する。安山岩製で、横剥ぎの薄手剝片を利用し、下部は両面より、上部は片面よりの剝離で刃部を作出する。

Fig. 8-1~4は何れもスクレイパーである。1は玄武岩製の大型スクレイパーである。横斜め方向からの剝離によって得られた粗大な剝片を用いている。刃部形成の為の剝離はほぼ全周にわたるが、調整そのものは雜である。2も玄武岩製スクレイパーである。肉厚の縦長剝片を利用する



石鉈出土状況

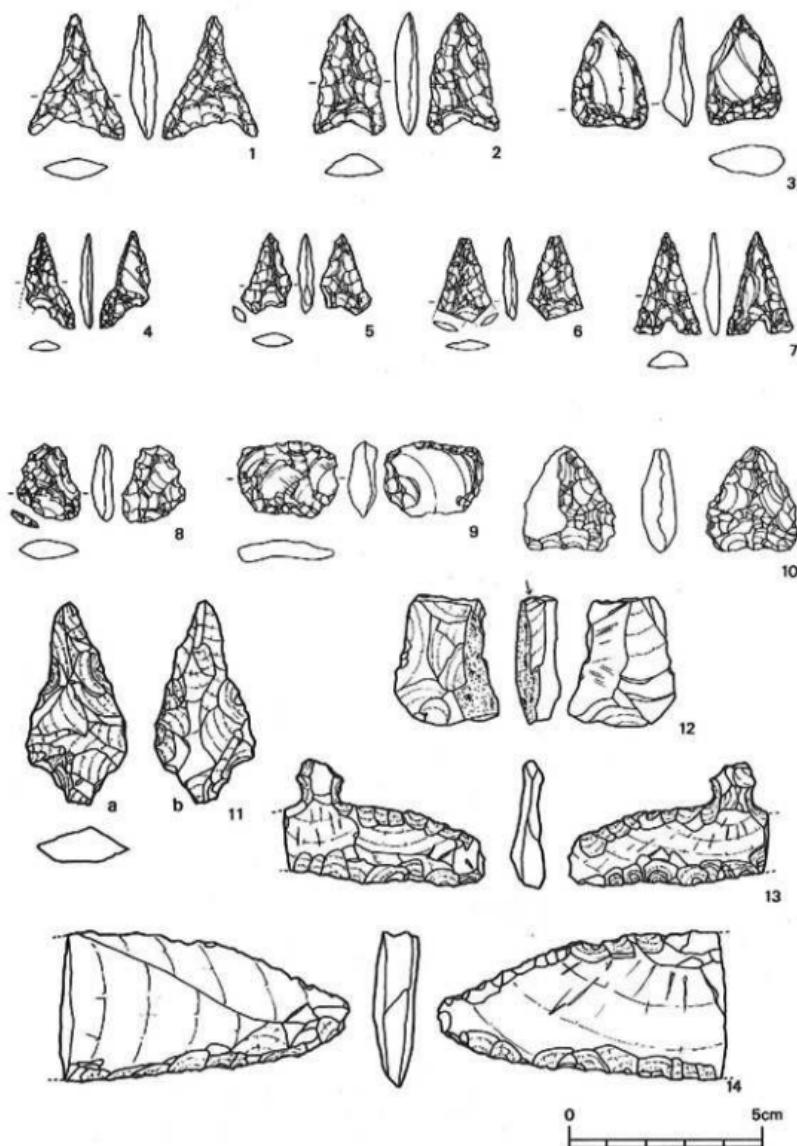


Fig. 7 表土出土石器 (2/3)

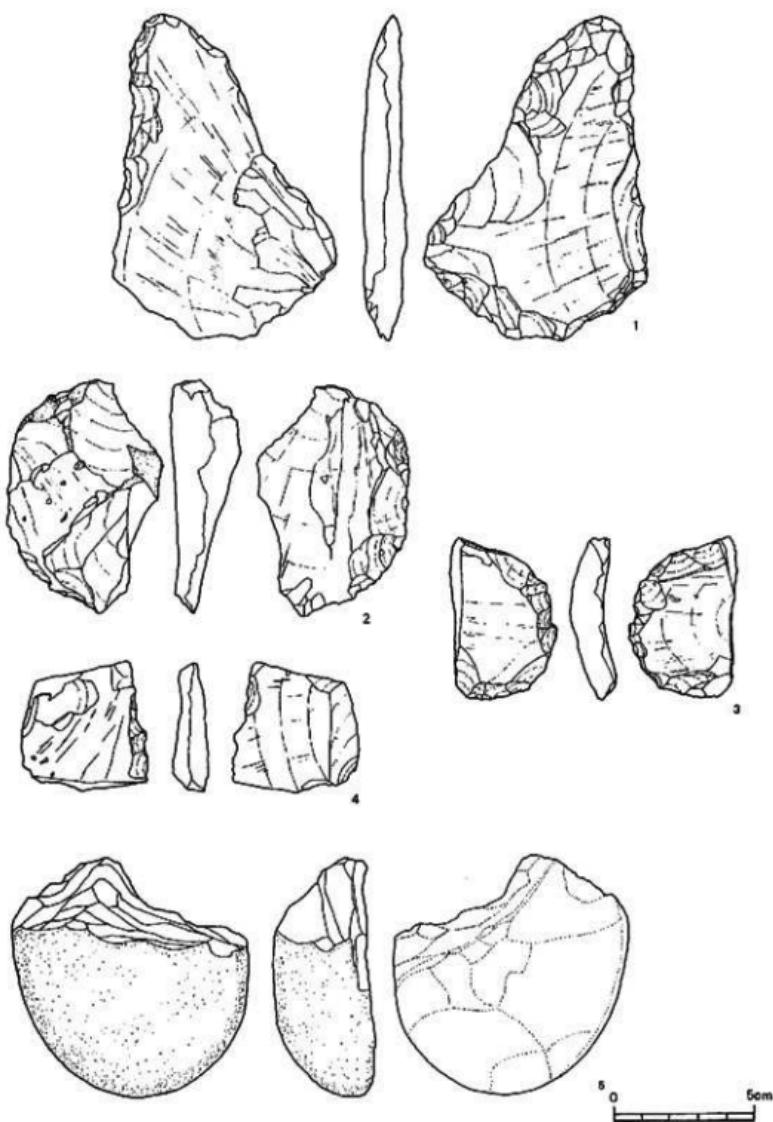


Fig. 8 貝土出土石器 (1/2)

る。調整は椎で厚みも一定しないなど不整一である。片側のみに主に片面からの剥離を施して刃部を作出する。3は側縁に自然面を残した安山岩製のスクレイバーである。二次加工は両面より行い刃部を作出する。断面は「く」の字を呈する。4は玄武岩製。横剥ぎの剥片を利用する。刃部は片面からのみの剥離により形成されている。5は安山岩製尖頭状砾器である。縦に半割の状態にした後の尖頭部加工とも思えるがローリングが進行している為定かでない。この種の石器は海浜部の遺跡でよくみられるもので時期的には縄文～弥生を通じて存在する。

Fig. 9 1は肉厚の剥片に全周にわたって調整を加える。一端を欠損するが、打製石斧の可能性を有する。2も同様な剥片を調整して形状を整える。石斧と同時に錐状石器の可能性も考えられる。玄武岩製である。

Fig. 10-1～4は黒曜石製u・lである。何れも縱長剥片の側縁部を利用している。6はサイドブレイドである。三辺に主に片面からの剥離調整を行う。黒曜石製。7～10は同じ黒曜石の石器である。9を除き完形か又は完形に近い。11～14は石錠であろう。11は玄武岩製。大まかな剥離で細部は調整が不十分。未製品であろう。12は安山岩。肉厚の剥片に全周にわたって剥離調整を行う。上部を欠損する為不明瞭であるが石錠の基部であろう。13も同じ石錠の基部と思われる。石錠が主に安山岩か玄武岩の比較的大型剥片を利用する比率が高いのに比して黒曜石を用いる。その分だけ小型である。14は石錠の先端部分で下半を欠損する。安山岩製で全周より剥離調整を行う。

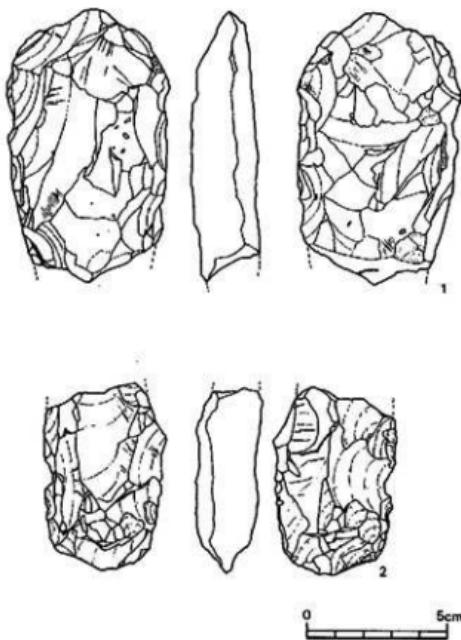


Fig. 9 表土出土石器 (1/2)

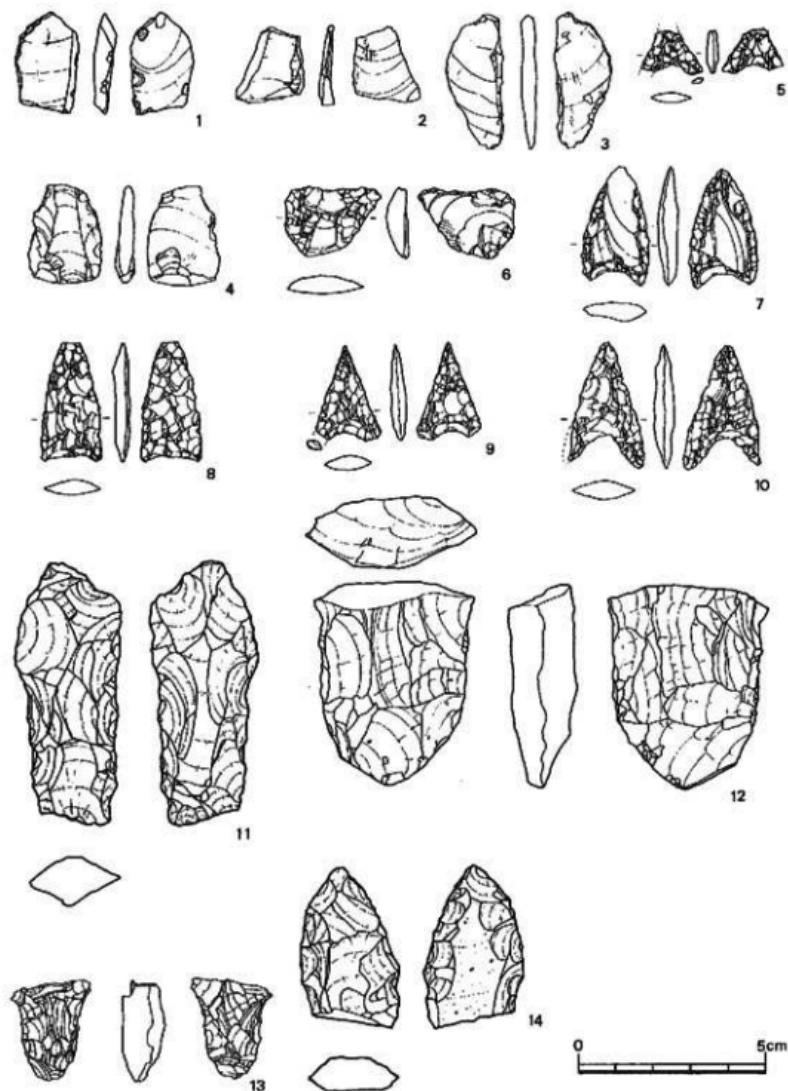


Fig.10 Ⅲ層出土石器 (2/3)

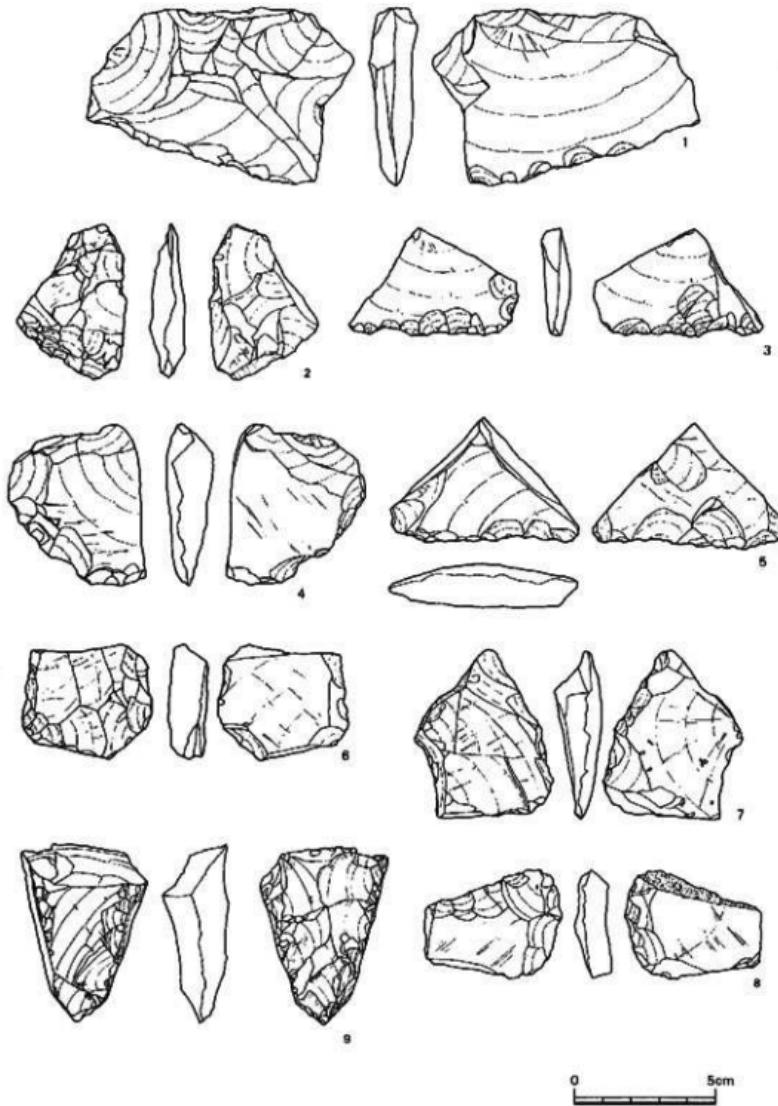


Fig.11 田層出土石器 (1/2)

III層出土石器

Fig.11-1~8はスクリイバーである。1は安山岩。横削ぎの薄手の剝片の一端に面面よりの剝離を加えて刃部を作出する。2は旧状三角形をしていたものと思われる玄武岩の小剝片を利用し粗い調整剝離を施す。一側縁部のみに刃部を持つ。3は横削ぎの薄手剝片の一端に両面からの細かい二次加工を施す。上面には自然面が残る。玄武岩製。4も玄武岩製のスクリイバーである。原剝片の形状は明確でないが、横削ぎの素材と思われる。二次加工は両面から行っているが一部を欠損する。5も玄武岩製である。両面より剝離を施し刃部を形成する。6は安山岩製スクリイバーである。上下両端に欠損部をもつ。側縁は共に両面からの剝離で刃部を作出する。7は横削ぎの不定形剝片の一端に両面からの細かい剝離を施す。打面部に自然面を残す。玄武岩製である。8は一定の厚みを持つ玄武岩剝片の二辺に剝離を行って形状を整える。一辺には自然面を残す。9はぶ厚い縦長の玄武岩剝片には、全周にわたって細かい調整剝離を施し一端を尖らせる。上部を欠損している為全体の形状が不明であるが、石錠の基部かあるいはポイントの可能性を持つ。

IV層出土石器

Fig.12-1~5は石鎚である。何れも黒曜石製である。6はサイドブレード。薄手の黒曜石剝片に全周にわたって細かい二次加工を行う。一部に自然面を残す。材には白い粒子が認められ良質の黒曜石とはいえない。7は黒曜石の彫器である。一定の厚みを持つ剝片を利用して、5回の小さな加熱によって極状剝離を形成する。刃部の反対部に自然面を残す。8、9は石匙である。何れも玄武岩を素材とする。8はつまみ上部と側縁に欠損部をもつ。薄手の剝片に両面からの二次加工を施して形状を整える。9は極めて薄手の剝片を利用し、側縁部にのみ両面からの二次加工で刃部を作出する。下部欠損。10~12は石錠である。10は玄武岩製。完形品で全周にわたって剝離を行い形状を整える。11は同じ玄武岩製で、縦長剝片を利用し側縁部のみ剝離を施し尖頭状に整える。上端を僅かに欠損する。12は定形品の石錠である。全周に丁寧な二次加工を施して整った形状を為す。基部には抉りを作出する。又b面中央には浅い溝状の凹みがみられるが意識的な作り出しかどうかはよく判らない。凹みが意図的なものであるなら、基部の抉りと合わせて着柄時の緊縛には極めて有効であろう。

Fig.13-1は玄武岩製石匙である。不用になった磨製石斧の転用品と思われ、両面の一部に研磨痕が残存する。全周にわたって剝離調整を行い形状を整えているが、全体的に粗雑な作りとなっている。2は玄武岩製のスクリイバーで、横削ぎの大型剝片を利用する。下部のみに両面からの剝離によって刃部を作出する。剝片及び刃部も共に若干そり気味であるが、総じて刃部の作りは丁寧である。3は一定の厚みをもった玄武岩剝片を利用したスクリイバーである。両面からの全周にわたる交互剝離によって刃部を作出する。全体的な形状は龟の甲羅型を為す。4は横削ぎの安山岩剝片を利用するスクリイバーである。二側辺以上に刃部作出の為の片面からの剝離が観察される。欠損品である。5は薄手の玄武岩縦長剝片を利用し、一辺に片面よりの二

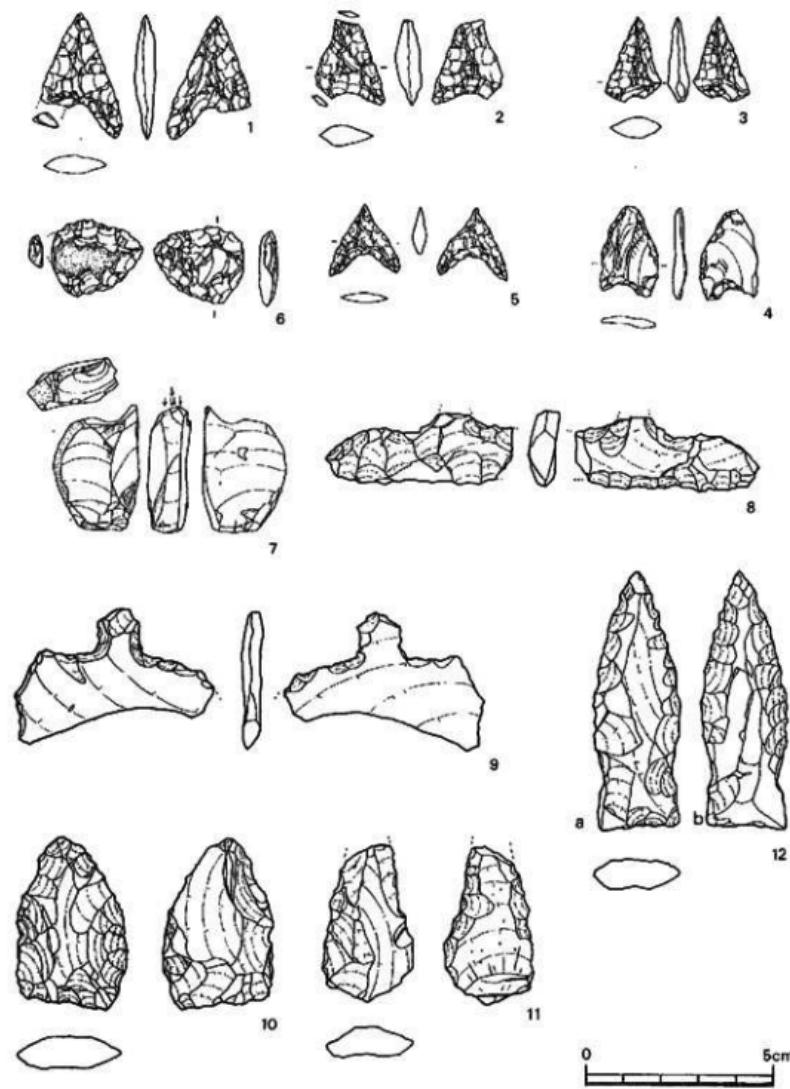


Fig.12 IV層出土石器 (2/3)

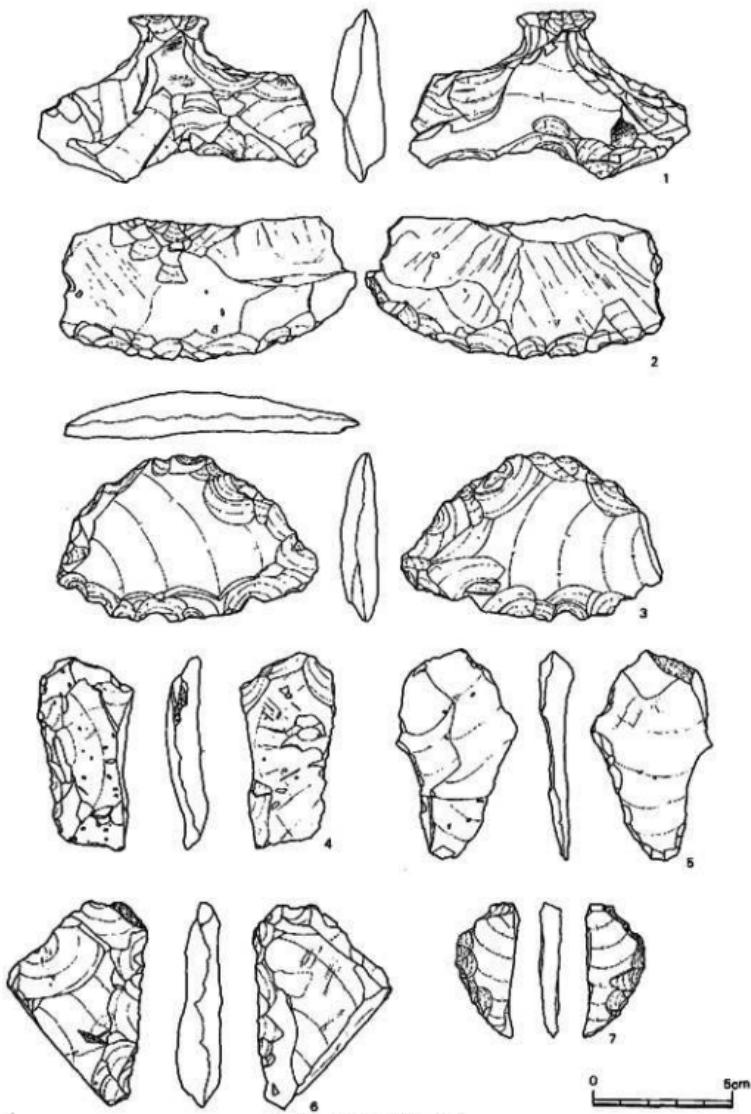


Fig.13 IV層出土石器 (1/2)

次加工を施して刃部を作出する。上端打面部に自然面を残す。6は一定の厚みをもつ横割ぎの玄武岩剝片にはば全周から剥離調整を施したスクレイバーである。折損の為半裁品となる。7も同様折損面を持つ安山岩製のスクレイバーで縦長剝片の側縁に両面からの二次加工を行う。

Fig.14-1は肉厚の円錐状安山岩剝片を利用する。全周からの荒い交互剝離によって形状を整える。スクレイバーであろう。2は一定の厚みをもつ玄武岩剝片に全周から二次加工を行って形状を整える。上部の浅い抉りから、縦型石匙や或いは下部のふ厚い刃部の状況から打製石斧の可能性も考えられるが、ここでは一応スクレイバーとしておく。3は砾石である。砂岩製で1個のみの出土である。縱割れした半裁品であるが表面一部に研磨痕を有する。

(高野)

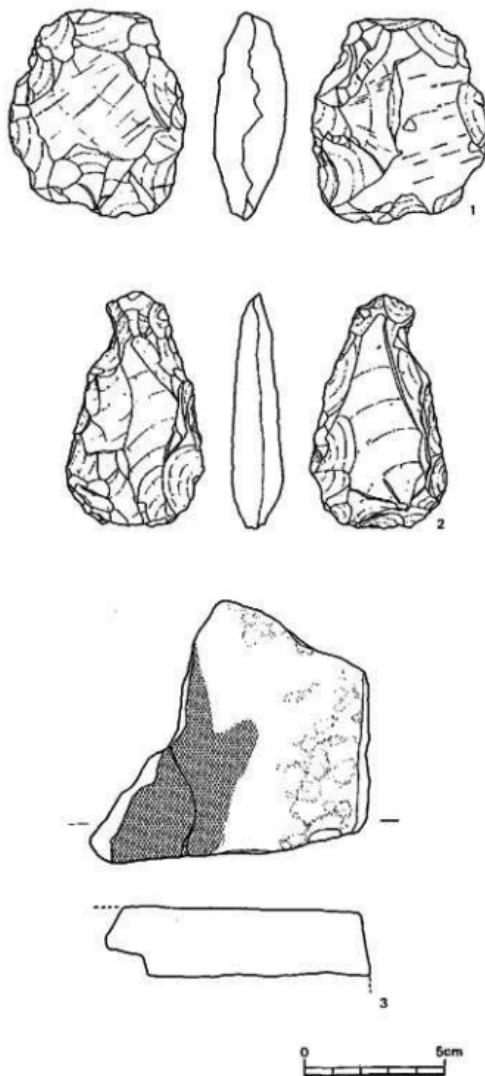


Fig.14 背層出土石器 (1/2)

Tab. 2 出土石器器測表 ①

計測値は最大値

Fig.番号	出土区	出土層位	計測値				石材	器種
			長(cm)	巾(cm)	厚(cm)	重(㌘)		
Fig. 7-1	C	I	2.7	2.2	0.6	2.8	安山岩	石鏟
7-2	E	I	2.7	1.6	0.6	2.7	黒曜石	*
7-3	C	I	2.7	1.9	0.8	3.0	*	*
7-4	A	I	1.8	1.1	0.3	0.6	*	*
7-5	F5	I	1.8	1.0	0.4	0.7	*	*
7-6	C	I	2.1	1.4	0.3	0.6	*	サイドブレイド
7-7	F11	II	2.2	1.4	0.4	1.1	*	*
7-8	F5	I	1.8	1.5	0.5	1.4	*	*
7-9	A	I	1.7	2.5	0.7	2.9	*	*
7-10	C	I	2.6	2.3	0.8	4.6	*	石鏟
7-11	C	I	5.1	2.6	0.8	10.0	安山岩	石鏟
7-12	C	I	3.3	2.4	1.1	10.0	玄武岩	形器
7-13	A	I	2.8	5.0	0.7	0.5	安山岩	石匙
7-14	C	I	3.8	7.4	1.1	30.0	*	*
Fig. 8-1	C	I	11.5	7.8	1.5	125.0	玄武岩	スクレイバー
8-2	C	I	5.3	8.2	2.4	75.0	*	*
8-3	A	I	5.3	3.6	1.2	30.0	*	*
8-4	A	I	4.3	4.4	1.2	30.0	*	*
8-5	A	I	8.3	8.2	3.4	300.0	安山岩	礫器
Fig. 9-1	C	I	9.6	5.8	2.3	170.0	玄武岩	打製石斧(?)
9-2	C	I	6.4	4.3	2.2	75.0	*	*
Fig. 10-1	A	I	2.5	1.6	0.5	1.7	黒曜石	u. f.
10-2	F5	I	1.9	1.7	0.4	1.2	*	*
10-3	F9	I	3.6	1.4	0.3	2.1	*	*
10-4	F3	II	2.1	1.9	0.5	2.5	*	*
10-5	G III	III	1.8	2.5	0.5	2.1	*	石鏟
10-6	F7	III	1.0	1.4		0.4	*	サイドブレイド
10-7	G 5,6	III	2.7	2.7	0.5	2.5	*	石鏟
10-8	G 1	III	3.0	1.5	0.4	1.8	*	*
10-9	F11	III	2.3	1.6	0.4	1.2	*	*
10-10	A	III	2.4	1.6	0.5	2.0	*	*
10-11	E	III	6.7	2.8	1.3	25.0	玄武岩	石鏟
10-12	E	III	5.3	4.3	1.7	50.0	安山岩	*
10-13	F9	III	2.5	1.9	1.1	4.8	黒曜石	*
10-14	E	III	4.0	2.6	0.9	10.0	安山岩	*

Tab. 3 出土石器計測表 ②

計測値は最大値

Fig.番号	出土区	出土層位	計測 値				石材	器種
			長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
Fig. 11-1	E	III	6.1	8.6	1.5	80.0	安山岩	スクレイバー
11-2	A	III	5.5	4.8	1.2	20.0	玄武岩	*
11-3	F11	III	4.7	5.7	0.9	20.0	*	*
11-4	A	III	5.7	4.7	2.2	40.0	*	*
11-5	F3	II	4.3	6.7	1.5	30.0	*	*
11-6	A	III	4.0	4.6	1.3	35.0	安山岩	*
11-7	F7	III	6.9	4.6	1.6	40.0	玄武岩	*
11-8	F11	III	6.2	4.3	2.3	55.0	*	*
11-9	F7	III	3.6	4.8	1.1	25.0	*	石錘(?)
Fig. 12-1	A	IV	2.4	2.0	0.5	2.2	黒曜石	石鏃
12-2	A	IV	1.9	1.6	0.7	1.8	*	*
12-3	A	IV	2.1	1.5	0.5	1.1	*	*
12-4	A	IV	1.9	2.4	0.5	2.2	*	*
12-5	F11	IV	1.2	1.3	0.3	0.6	安山岩	*
12-6	F11	IV	2.1	1.4	0.4	1.0	黒曜石	サイドブレード
12-7	A	IV	3.3	2.3	1.0	9.3	*	彫器
12-8	G1	III	1.8	4.9	0.7	0.5	玄武岩	石匙
12-9	A	IV	2.7	5.0	0.5	10.0	*	*
12-10	A	IV	2.7	4.9	0.5	10.0	*	石錘
12-11	A	IV	4.0	2.3	0.7	10.0	*	*
12-12	A	IV	6.7	2.3	0.7	15.0	*	*
Fig. 13-1	A	IV	4.9	9.8	2.7	75.0	*	石匙
13-2	A	IV	4.8	10.4	1.5	70.0	*	スクレイバー
13-3	C	IV	5.7	9.2	1.3	75.0	*	*
13-4	E	IV	7.2	3.4	1.1	30.0	安山岩	*
13-5	A	IV	7.2	4.2	1.2	30.0	玄武岩	*
13-6	F2	IV	7.2	4.8	1.6	50.0	安山岩	*
13-7	A	IV	4.8	2.1	0.7	10.0	玄武岩	*
Fig. 14-1	C	IV	7.3	6.2	2.5	130.0	安山岩	スクレイバー
14-2	A	IV	8.3	4.7	1.8	75.0	玄武岩	石匙(?)
14-3	A	IV	9.0	9.2	2.4	240.0	砂岩	砥石

6. まとめ

調査は、第1次緊急調査分44m²、第2次範囲確認の為の試掘を含む109.7m²の計153.7m²について実施した訳であるが、Fig.15に示した如く、遺物・遺構の包蔵範囲は400 m²程度に限定されるものと思われる。

遺物は土器、石器合わせて1,400点程が出土しているが、特に土器については図示し得る資料が極めて少なく、又紹介資料についても類例に乏しい為に明確な土器型式を云々する事が難しい。只、土器の項で述べた如く、轟式土器の系統のものと、窓ノ神式土器の資料が混在しており、一部阿高系の土器と合わせて、近接する「つぐめの鼻遺跡」(421)とよく似た内容をもっている。

石器は、出土数1,261点の内、石器と認定されるのは使用痕のある剣片を含めて188点であり15%を占める。

Tab. 4に示した組成表の中で際立った特長は大型のサメカイト質の石材を利用したスクレイバーの存在である。小ぶりな黒曜石よりも、鋭利さには欠けても大型剣片の必要性があったものであろう。



Fig.15 遺跡範囲図

Tab. 4 出土石器組成石材別一覧表

出土場所 層位	器種 類	石材												石原 核	計		
		石 英 結 晶 片 岩	石 サ イ レ イ ト ー ル ー ト	ス タ ン レ イ バ ー	石 ダ シ イ バ ー	楔 形 石 器	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	石 器	鐵 器	石 磨	磁 石	佛 像 片 ・ 修 片 ある の 石				
地上部 層	黒頭石	13	1	2	2	1	1						13	346	12	2	392
	安山岩又は玄武岩		1		11	2	1	2		1	3	11	63	6		101	
	結晶片岩												3			4	
Ⅲ 層	黒頭石	5	1	1	3	1							18	193	3	1	226
	安山岩又は玄武岩	3		15				1		2	7	78	2		108		
	結晶片岩										2				2		
Ⅳ 層	黒頭石	5	1	2	—	1	3	—	—	—	7	242	2	4	267		
	安山岩又は玄武岩	3		19	4		1				17	194			148		
	結晶片岩										10				10		
	石英							2							2		
	砂岩										1				1		
	計	23	9	4	52	6	3	4	3	1	2	1	1	5	1	73,1,011	
														25	7	1,361	

同時に石錘の存在がある。この種の石器は、現在、長崎県、福岡県を中心とし、立地的に外洋に面した遺跡を中心として27ヶ所程が知られており、人形魚類や海棲哺乳類を対象とした刺突漁業がその機能として考えられている。なお海岸部に面した遺跡でありながら、網漁用と思われる石錘や、貝類の捕獲、調理用と思われる礫器の僅少さは、対象とした捕獲物の相違をあらわしているものかも知れない。

このような遺跡の性格は、やはり「つぐめの鼻遺跡」の内容と極めて類似しており、遺跡の時期も又同様で早期末～前期前半頃を主体とし、一部中期末まで存続したものと思われる。

(高野)

(註)

1. 長崎県教育委員会「つぐめの鼻遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報 IV

長崎県文化財調査報告書 第82集 1986

2. 橋 丹信「石結」『史学論叢』10 別府大学史学研究会 1979

同書には21遺跡とあるが、その後下記の遺跡で発見されている。

1 長崎県壱岐郡ノ浦町錦崎海岸

2 ◊ ◊ ◊ 名切遺跡

3 ◊ 福江市白浜貝塚

4 ◊ 北松浦郡小筑賀町殿崎遺跡

5 ◊ 上原郡峰町佐賀貝塚

6 ◊ 北松浦郡田平町前日遺跡

阿れも対馬海流に洗われる沿岸部に位置する。

PLATES

I 前日遺跡



調査区遠景（矢印）



調査区近景



F.Q区調査状況



F区調査状況



F-5区 北壁



G-5.6区 西壁



A区 北壁



E区 北壁



遺物出土狀況



遺物出土狀況



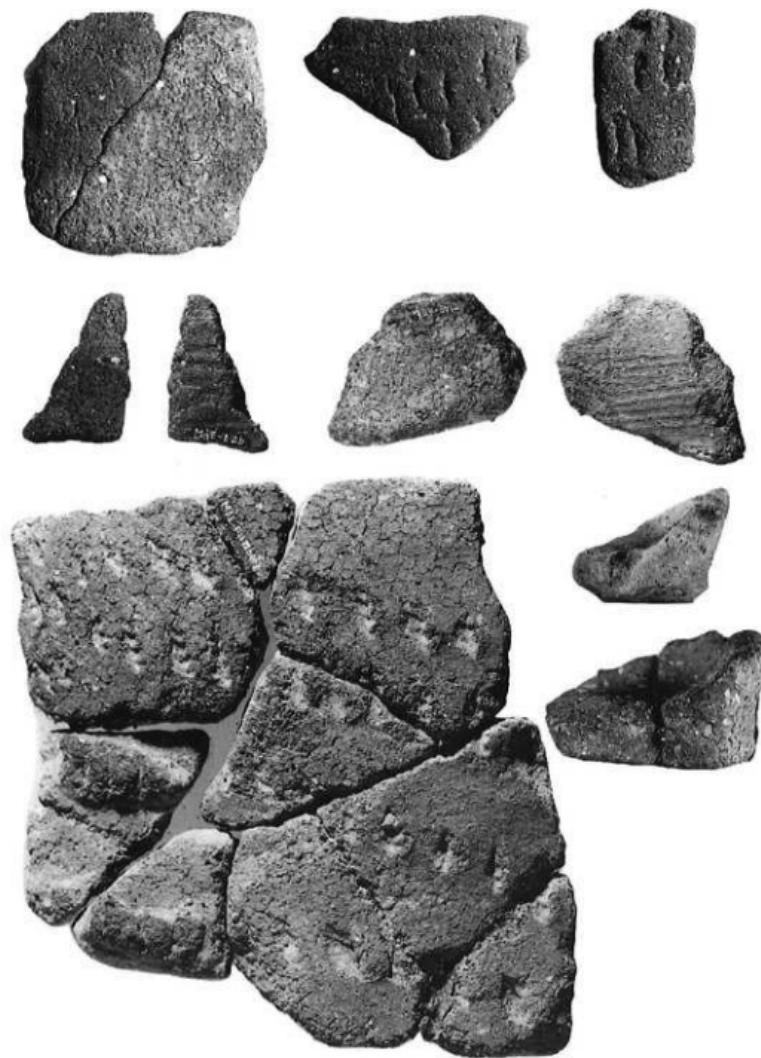
遺物出土状況



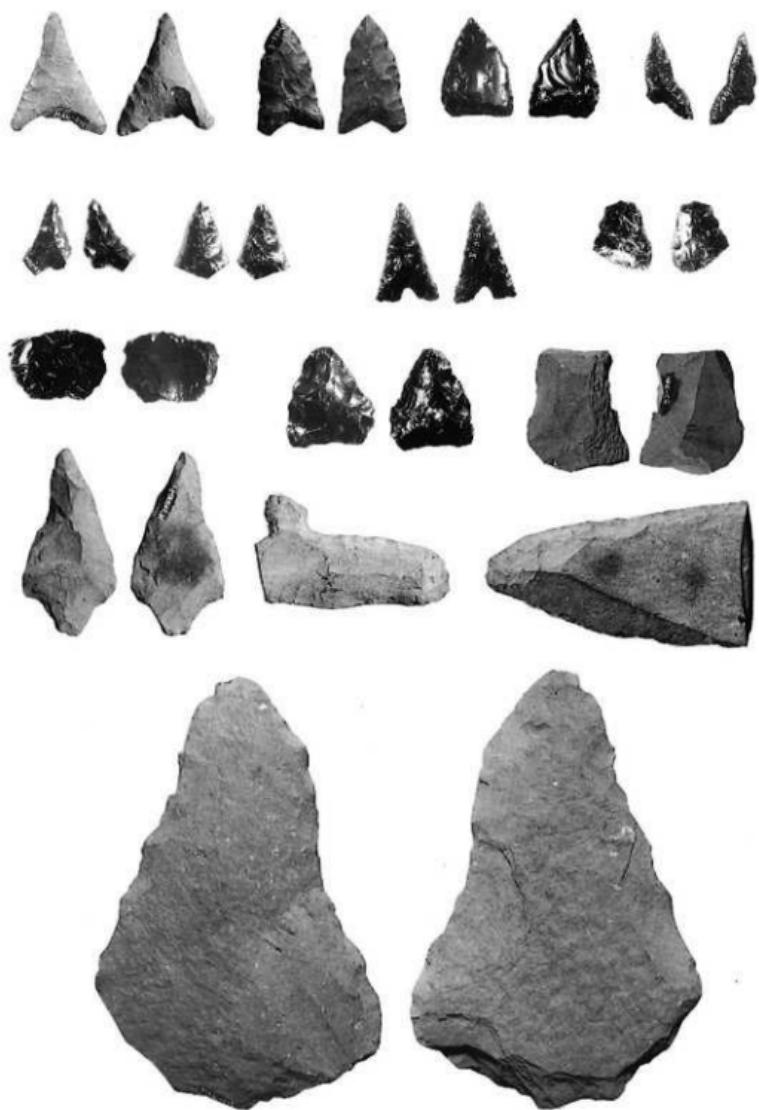
遺物出土状況



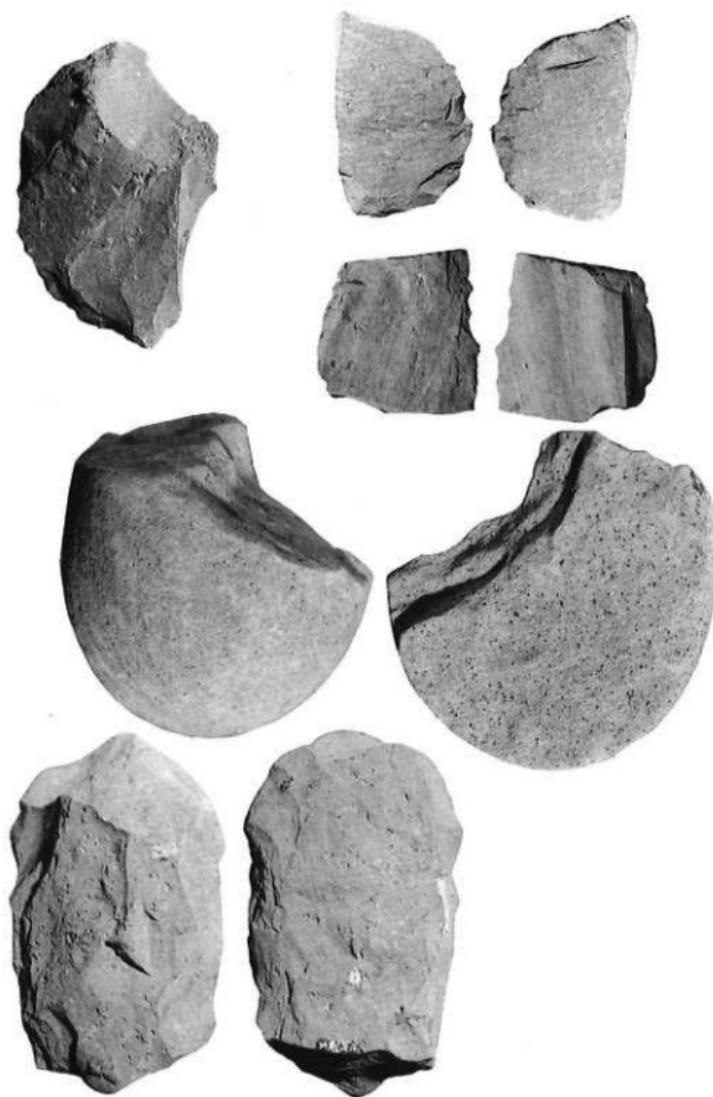
三周出土土器① (1/1)



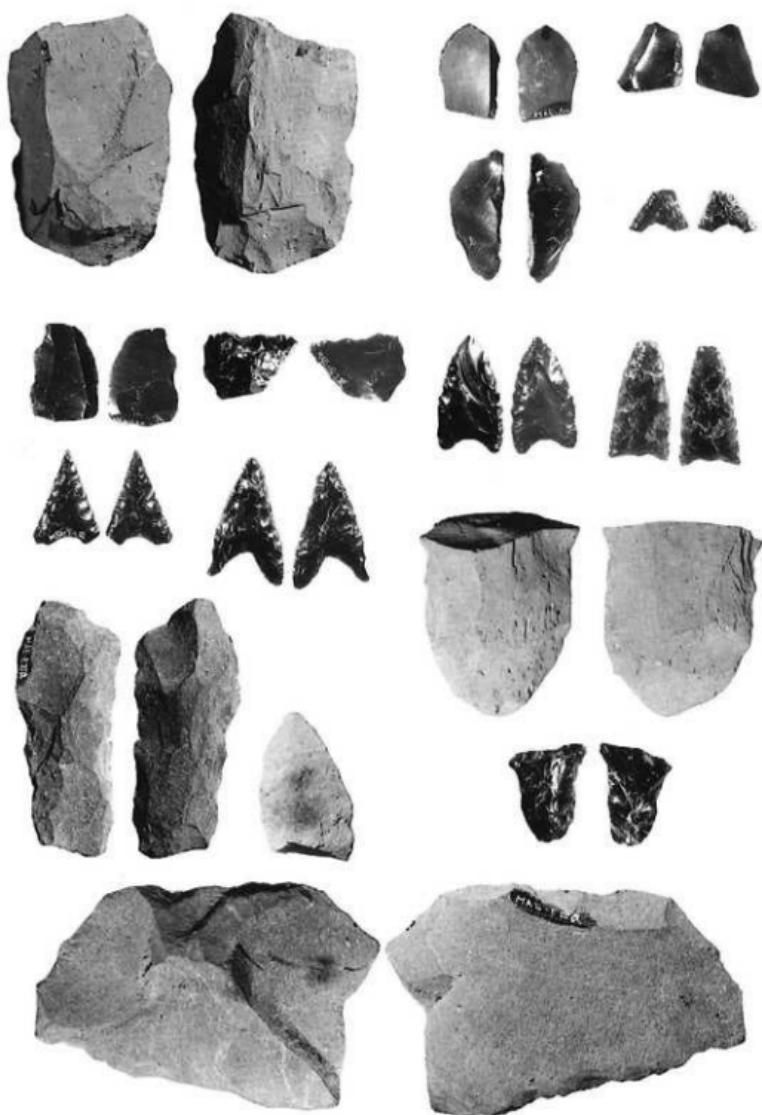
IV層出土土器② (2/3)



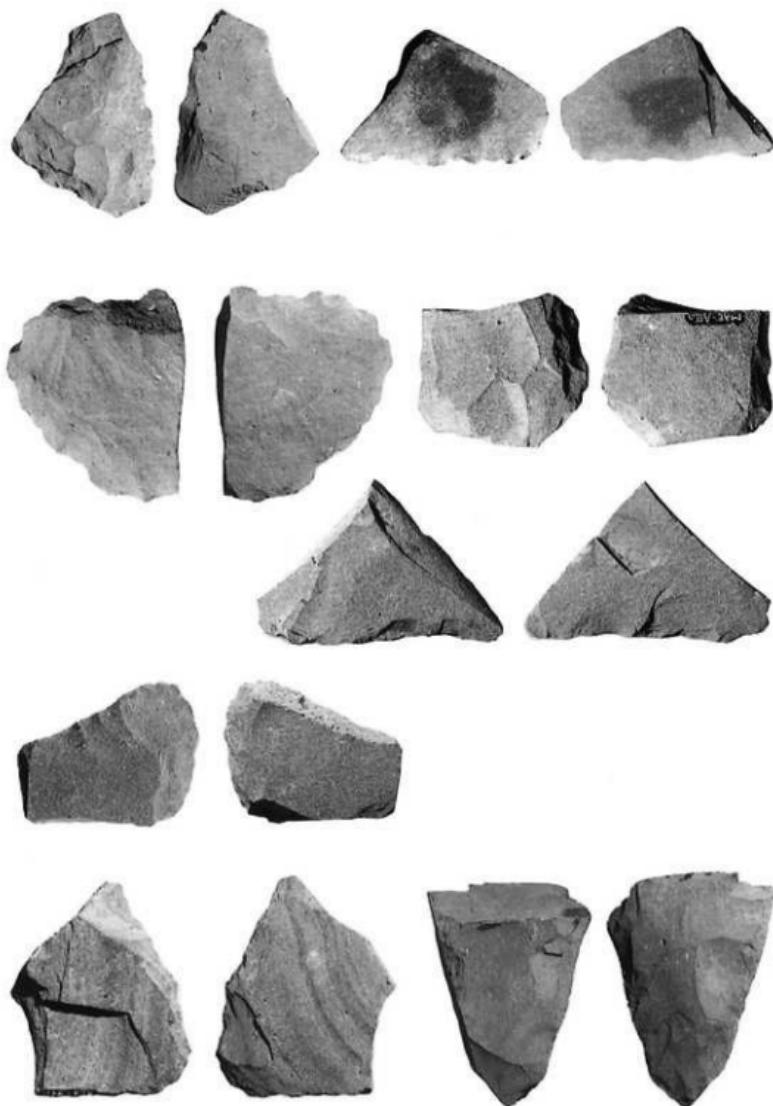
表土出土石器① (2/3)



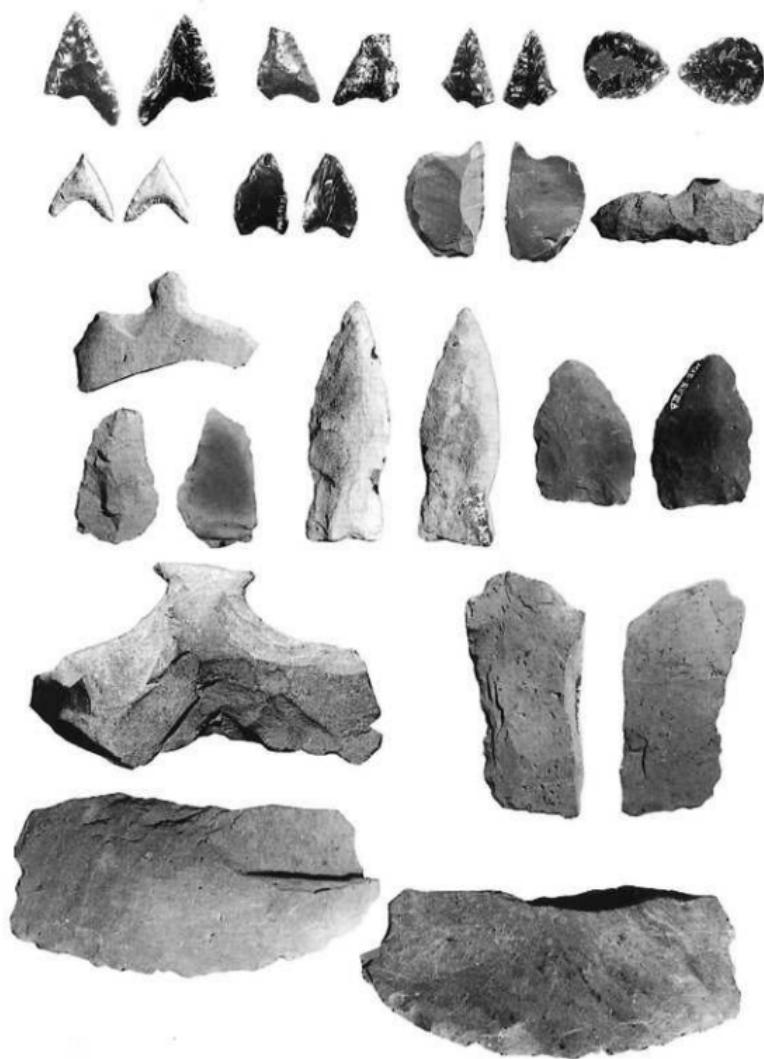
表土出土石器② (2/3)



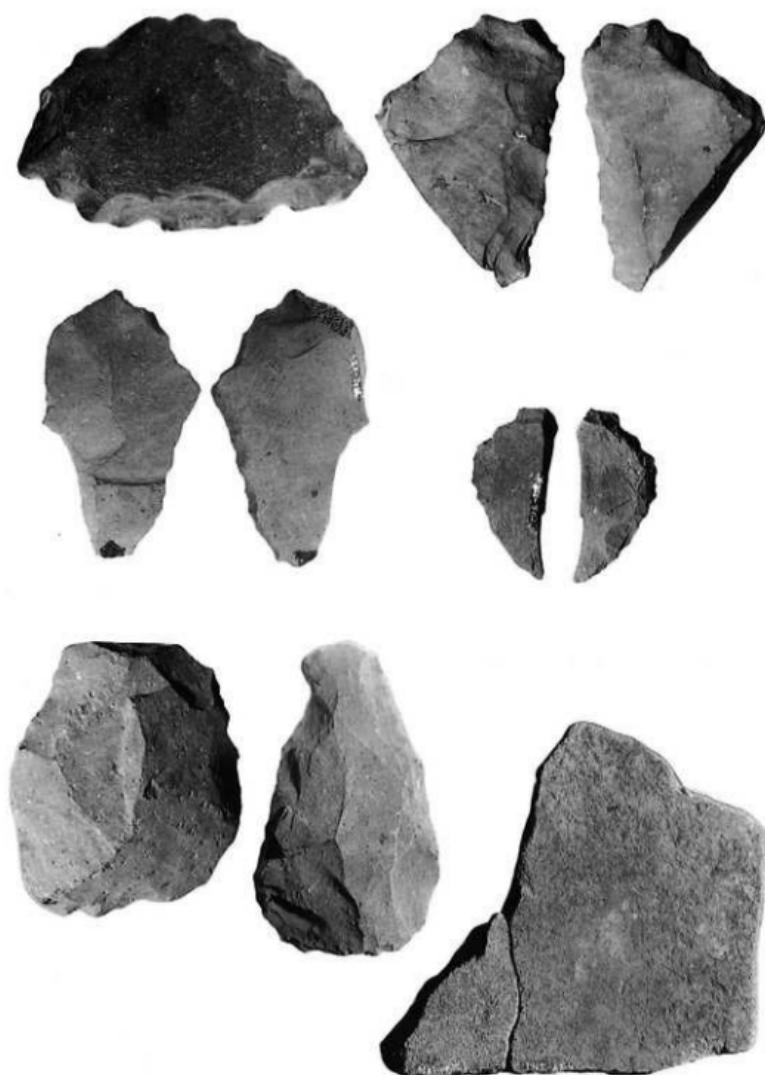
III層出土石器③ (2/3)



Ⅲ層出土石器④ (2/3)



IV層出土石器③ (2/3)



IV層出土石器⑥ (2/3)

II 白岳遺跡

----- 北松浦郡江迎町所在 -----

例　　言

- 一、本書は、江迎町「ふるさと自然公園、国民休養地」建設に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書である。
- 二、調査は、長崎県自然保護課の依頼により県文化課が行った。
- 三、調査は長崎県文化課高野晋司、伴橋一郎が担当した。
- 四、本書は分担執筆し、執筆者名は各項末尾に記した。
- 五、本書掲載遺物は一部を除き、現在文化課が保管中である。
- 六、本書作成に当り右記の者の助力を得た。　長嶋　徹
- 七、本書の編集責任は村川逸朗にある。

本 文 目 次

1. 調査にいたるまで	51
2. 調　　査	51
3. 上　　層	53
4. 遺跡の立地と周辺の遺跡	59
5. 周辺の遺跡と遺物	59
6. 出土遺物	65
7. ま　　と　　め	70

表　　目　　次

Tab. 1 石器計測表 ①	72
Tab. 2 〃 ②	73
Tab. 3 〃 ③	74

図　　版　　目　　次

PL. 1 遺跡遠景、近景	77
2 周辺遺跡の石器①1/1	78
3 周辺遺跡の石器②1/1	79
4 白岳遺跡出土の石器①1/1	80
5 白岳遺跡出土の石器②1/1	81
6 白岳遺跡出土の石器③1/1	82

挿　　図　　目　　次

Fig. 1 調査区配置図	52
Fig. 2 T.P. 区遺物出土状況	54
Fig. 3 T.P. 〃	55
Fig. 4 T.P. 〃	56
Fig. 5 T.P. 〃	57
Fig. 6 T.P. 〃	58
Fig. 7 周辺遺跡	60
Fig. 8 周辺遺跡の石器①2/3	62
Fig. 9 周辺遺跡の石器②2/3	63
Fig. 10 周辺遺跡の石器③2/3	64
Fig. 11 白岳遺跡出土の石器①2/3	66
Fig. 12 白岳遺跡出土の石器②2/3	67
Fig. 13 白岳遺跡出土の石器③2/3	68
Fig. 14 白岳遺跡出土の石器④2/3	69

1. 調査にいたるまで

江迎町はかねてより、環境庁の構想である「ふるさと自然公園、国民休養地」誘致の働きかけを行ってきたが、昭和60年度より5ヶ年計画による建設が認められることとなった。

公園の対象となるのは北松県立公園内にある白岳地区で、計画によると33ヘクタールの広大な地に集会、展示室、スポーツ、イベント広場などの公共施設を建設するもので、その為に場所によっては若干の起伏修正を伴うものであった。

一方、白岳池を含む当該地は古くより「白岳池周辺遺跡」として知られ、ナイフ型石器や黒曜石製石器などが多く採集されており、開発と文化財保存との調整を計る必要が生じた事となった。

公園計画は県自然保護課と江迎町が中心となっていたが、自然保護課よりの要請でとりあえず当該地の現地踏査を行う事とし、昭和60年1月28日～29日簡単な試掘を含む現地調査を実施した。

その結果、白岳池周縁の3地点に於いて遺物包含層らしきものを確認しその旨報告を行った。以後、自然保護課との協議を経た結果、3地点の内2地点については設計変更によって回避は可能であるが、残りの1地点は駐車場建設予定地であり、他に有力な候補地が無いところから、当該地の更に詳細なデータが要求されることとなった。

この為文化課は自然保護課の依頼で再調査を行うこととし、昭和60年3月4日～同月10日の7日間にわたり遺跡の範囲確認調査を実施することになった。
(高野)

2. 調査

駐車場予定地となる当該地は、3500m²程の広さを有し、標高は250～254mを計る。南北に傾斜し、傾斜度は3.5度で南側が高い。

試掘坑は7ヶ所設定し、高い方よりT.P. 1～T.P. 7とした(Fig. 1)。この結果、何れの調査区からも若干の遺物の出土はみるもの、最下段T.P. 5～T.P. 7は後世の擾乱がみられるなど土層の堆積に乱れがあった。反面、T.P. 1～T.P. 4区では良好な遺物の包含状況があり、特にT.P. 2、T.P. 4では下層に、旧石器時代の石器が整層状況で包含されている事を確認した。(Fig. 3～Fig. 5)

以上のデータを基礎として、再度自然保護課との保存の為の協議がなされることになった。

その結果、当初の駐車場建設予定では傾斜地に大巾なカットを含む起伏修正が行われる計画であったが、盛土をする事でカットを止め、更にアスファルト舗装を、取りはげし可能なインターロッキングブロックという工法に変更する事で合意した。関係者の御協力に感謝するものである。
(高野)

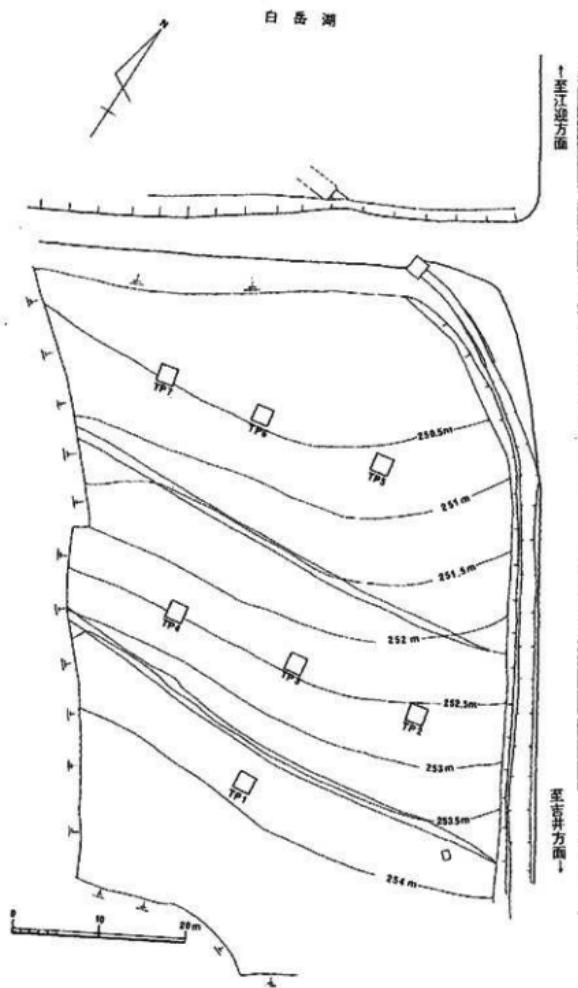


Fig.1 調査区配置図

3. 土層 (Fig. 3, Fig. 6)

前項で記した如く、T.P. 2, T.P. 4区に於いて良好な包含層を確認した。ここでは T.P. 2 と T.P. 5 の基本土層について説明を加えておく。

T.P. 2 の土層は 5 層に大別される。I 層は表土で 15cm 程の厚さを持つ。II 層は黒色土で 10cm 内外と薄く、遺物は現代までのものを含む。III 層は淡黄褐色粘質土で 15~20cm 程堆積する。縄文時代に属するものと思われる石器を含む。IV 層は III 層と色調的には大差無いが粘性が強くなる。20~25cm 程堆積する。V 層は混疊の暗黄褐色粘質土で下部には遺物を含まない。Fig. 3 では V 層にも相当遺物が存するようにみえるが、試掘坑自体北側へ低く傾いており、その北壁に遺物を投影した場合、実際より下部に位置してしまう結果による。Fig. 6, T.P. 5 区は標高 250.5m 程に位置し、調査区としては最下段に当る。上部 T.P. 2, 4 区とは堆積状況が異なり、II 層以下変化がみられる。I 層は表土、II 層は黒色土で 10cm 以内とかなり薄い。III 層は粘性の無い黄褐色土、IV 層は茶褐色の粘質土である。V 層は混疊の淡赤褐色土で IV 層は黒褐色土である。レベル的に白岳池水面に近いせいか湧水が始まる。遺物はこの層より数点出土しているが、直上の層から近世遺物が出土するなど擾乱気味である。

(高野)



T.P. 2 北壁

T.P.1

- フレーク
(灰青色ob)
- フレーク
(黒色ob)
- フレーク
(安山岩)

■■ 4

1 □

2 ■



—□■ 4

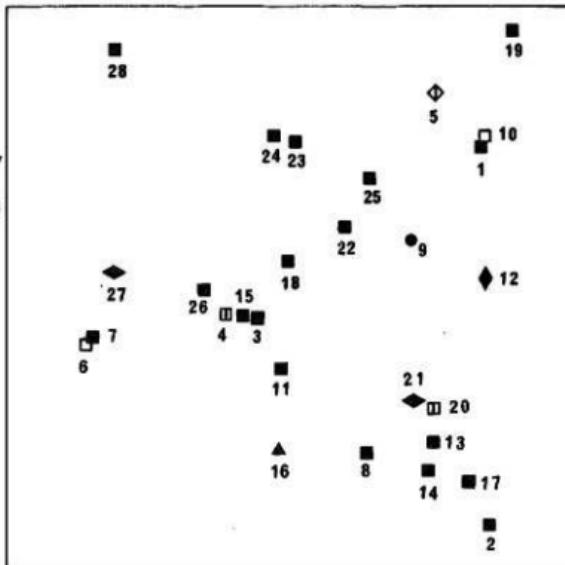
■□— 253m
2 1



Fig.2 T.P.1 区遺物出土状況

T.P.2

- フレーク
(黒色 ob)
- フレーク
(灰青色 ob)
- フレーク
(安山岩)
- ◆ U. フレーク
(黒色 ob)
- ▲ ナイフ形石器
(黒色 ob)
- ◆ 石核
(黒色 ob)
- ◆ チップ
(黒色 ob)
- 石錐
(黒色 ob)



T.P.2-16

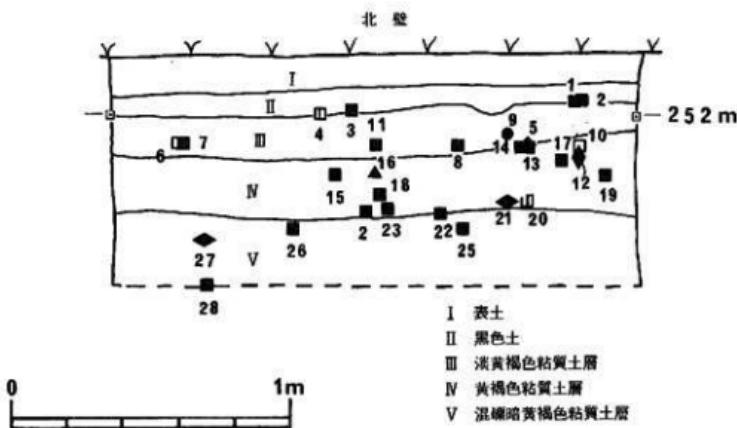
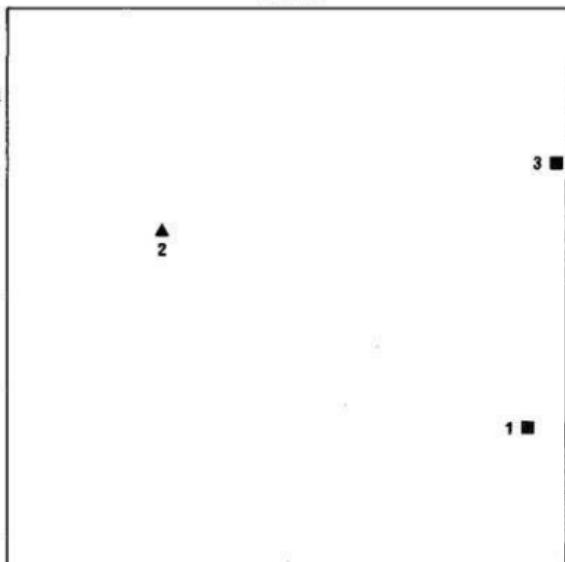


Fig.3 T.P.2 区遺物出土状況

T.P.3

- フレーク
(黒色 ob)
- ▲ ナイフ形石器
(黒色 ob)



— 252 m

1 ■

2 ▲



Fig.4 T.P.3 区遺物出土状況

T.P.4

■ フレーク
(黒色 ob)

□ フレーク
(灰青色 ob)

■ フレーク
(安山岩)

▲ ナイフ形石器
(黒色 ob)

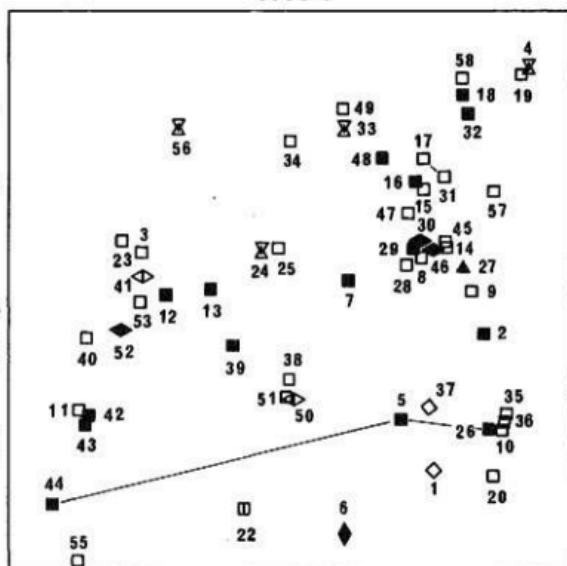
◆ チップ
(黒色 ob)

◇ チップ
(灰青色 ob)

☒ スクレーパー⁺
(灰青色 ob)

◆ 石核
(黒色 ob)

◇ U. フレーク
(灰青色 ob)



T.P.4-27

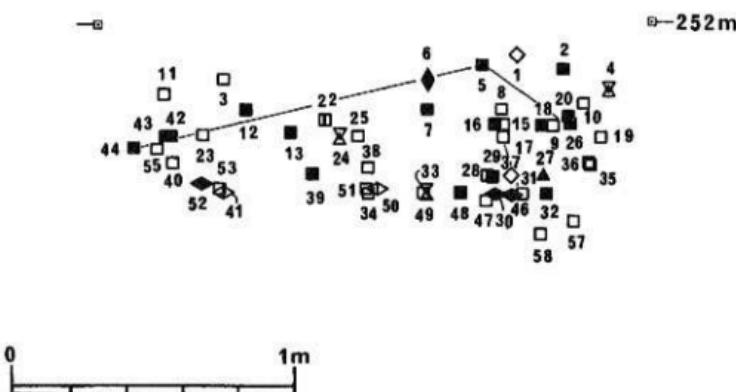


Fig.5 T.P.4 区遺物出土状況

T.P. 5

- ◆ U. フレーク
(安山岩)
- ◆ U. フレーク
(黒色 ob)
- エンド
スケレーパー⁻
(黒色 ob)

Φ
1

2
3

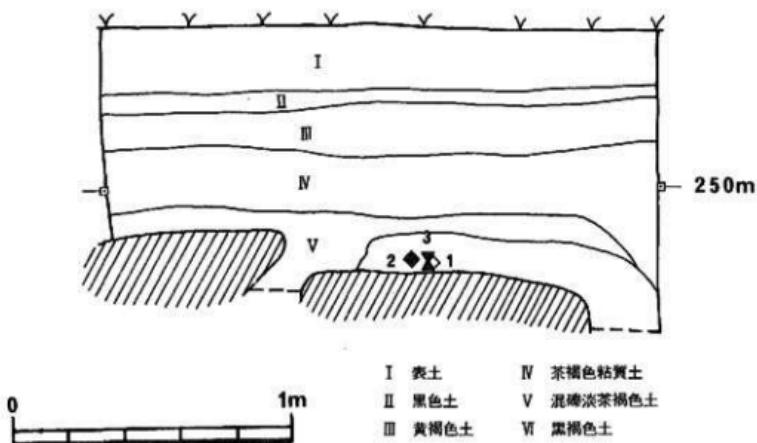


Fig.6 T.P.5 区遺物出土状況

4. 遺跡の立地と周辺の遺跡

白岳池周辺遺跡が立地する北松玄武岩台地は、九州の北西部に突出した北松浦半島の中央部に位置するが、この北松浦半島の地質は、砂岩を主とした古第三系とその上にのる第三紀末から前期洪積世にかけての玄武岩質溶岩から成っている。また、この台地上には何箇所かの湧水地点があり、現在は土堤を築き溜池として利用されている。今回報告する白岳池周辺遺跡も、湧水地点に土堤を築いて作った溜池の周辺に立地する。因みにこの台地の北側は、373.3mの標高をもつ白岳を越えると、ゆるやかな傾斜をもちらながら玄界灘へと没していく。また、この台地の東側は、佐々川断層がほぼ南北に走り、また、福井川の開析作用もあるところから急傾斜面をなし小渓谷を形成している。

周辺の遺跡としては、台地の北東端の遺跡からみていくと、辻田池遺跡、陣ノ尾池遺跡、前田遺跡、白岳池遺跡、福万寿池遺跡等がある。次に台地の東側の小渓谷中には、金城遺跡、福井洞穴、直谷岩陰がある。また、白岳を越えた北側及び西側はゆるやかな傾斜をもつところから、湧水地点を利用した溜池の周辺には、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が立地するが、今回は一番の近距離にあり出土遺物の量も多い明賀谷遺跡を挙げておきたい。そして、最近の新発見の遺跡としては、七輪遺跡がある。

(村川)

5. 周辺の遺跡と遺物

辻田池遺跡 (吉井町草ノ尾免字繩頭石) (Fig. 7-1), (Fig. 8-1~12)

Fig. 7 でみると標高250m ラインのところで平べったい台地の地形を形づくるのがわかるが、この辻田池遺跡は台地の北東端にある。現在は湧水池を土堤で締切って溜池としている。第8図1~7はナイフ形石器である。7点全部が破損品である為に、全体の大きさは残存部より類推するしかないが、2, 3, 5, 7は比較的大型のもので、1, 4, 6は中型と言えよう。1, 4は二側縁にプランディング加工を行うが、5, 6, 7は一側縁にしかプランディング加工が施されていない。7の資料はプランディング加工を施した反対側の側縁の表裏両面に使用痕が残っている。それはあたかも押しつぶしてできたような状態である。8は細石刃核の打面作出の過程でできるスキー状スパールの再加工品かとも思われるが、c面にみられるように縦からの剥離痕は認められず判断に苦しむ資料である。a面にみられるように右側縁下方の内溝する部分に細かな調整が認められる。9は使用痕ある剝片である。素材は縦長剝刃あるが、打瘤部はない。左右両側縁に細かな使用痕があるが、それは表側だけにしかない。10も使用痕ある剝片である。9の資料と違って局部的にしか使用痕はない。11は細石刃核である。打面は長軸方向からの一打によってつくられている。背面には礫面が残っている。側面の調整を6面でみると、打面の反対側からの調整であり、a面では、打面と反対側からの調整による。a, b い

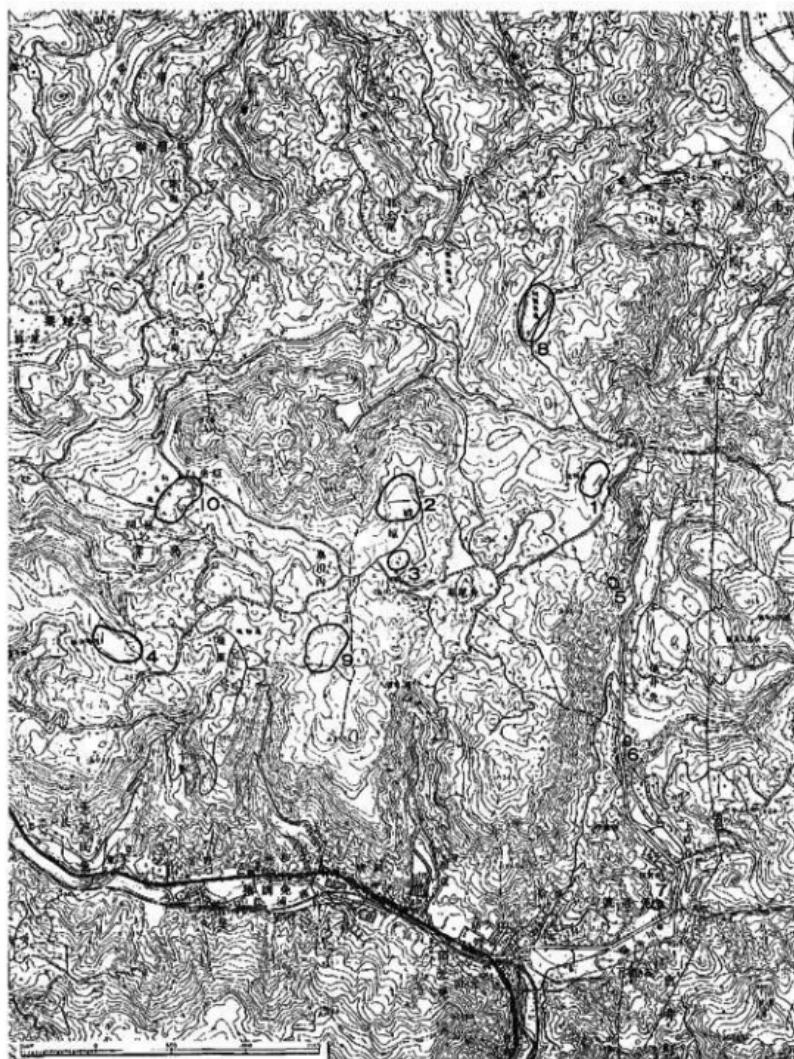


Fig.7 周辺の遺跡

- | | | |
|-----------|-----------|----------|
| 1. 辻田治遺跡 | 4. 福万寺池遺跡 | 7. 面谷岩陰 |
| 2. 離ノ尾池遺跡 | 5. 金城遺跡 | 8. 明賀谷遺跡 |
| 3. 前田遺跡 | 6. 福井洞穴 | 9. 七説遺跡 |
| 10. 白岳遺跡 | | |

ずの面も下端には細かな調整を施し舟底型に仕上げている。a面の下端左方には主要剝離面の一部が残っている。12はタブレット（打面再生剝片）である。c面には剝片剝離に際してのネガティブな剝離痕が残っている。b面にはパンチ痕も認められる。

陣ノ尾遺跡（吉井町草ノ尾免）（Fig. 7-2），（Fig. 8-13）

北側には白岳から東側に延びる山並が存在する。13は尖頭状石器である。素材は横長剝片であるが、1個の石核から連続して素材生産していくものとは異なる。断面は部厚い台形をなす。素材の厚さを減じるための調整剝離がa面にみるごとく右斜め下から施されている。そして、その後主要剝離面側から急角度の粗い剝離があたかも打面を除去するかっこうで施され、先端に続く部分は調整が入り入る。刃部側はc面にみるごとく先端部・基部に若干の調整をみる他はほとんどが無調整のまま残されている。b面下端には焼けた跡が残っている。

前田遺跡（吉井町草ノ尾免字前田）（Fig. 7-3），（Fig. 9-14~16）

現在は牧場となっている場所でまとまって採集できた。14は小型のナイフ形石器である。縦長剝片の打瘤部を斜めに断ち切る形でプランディング加工を施し、打点側が尖端部となる。15は台形石器である。両側縁にプランディング加工を施す。側縁加工は内湾し劣端部の両端は横に小さく張り出す百花台型の台形石器である。16は両側縁を折りとったものである。主要剝離面側の右縁上方に細かな剝離痕が認められる。

福万寿池遺跡（江迎町）（Fig. 7-4），（Fig. 9-18）

白岳池周辺遺跡の南方1km程の位置にある。標高が220m程で他の台地上の遺跡より若干低い。18はナイフ型石器である。比較的幅広の縦長剝片を素材とする。一側縁にプランディング加工を施す。使用痕がプランディング加工を施した部位の反対側の側縁に表裏両面につく。使用痕のつき方のタイプとしては7のナイフ形石器と同じである。

金城遺跡（吉井町福井免字金城）（Fig. 7-5），（Fig. 9-19）

福井洞穴対岸上沿いの急傾斜面上に位置するもので、草ノ尾に続く山道両際にサスカイトの原石が多数散在しているという状態である。切通しの断面にはサスカイトの剝片などが観察でき、この断面から過去に木葉形の両面加工の尖頭器が検出されている（Fig. 9-19）。

明賀谷遺跡（松浦市志佐町柏木免字明賀谷）（Fig. 7-8），（Fig. 10-20）

白岳池周辺遺跡より白岳を越えて、直線距離にして約2.5km程の北東の位置にある。この遺跡からは、ナイフ形石器、細石器類の石器、台形石器、グレーバー、剝片、石核、石斧、石匙等、多数の石器が出上している。20はグレーバーである。主要剝離面以外は、黒曜石の原礫面

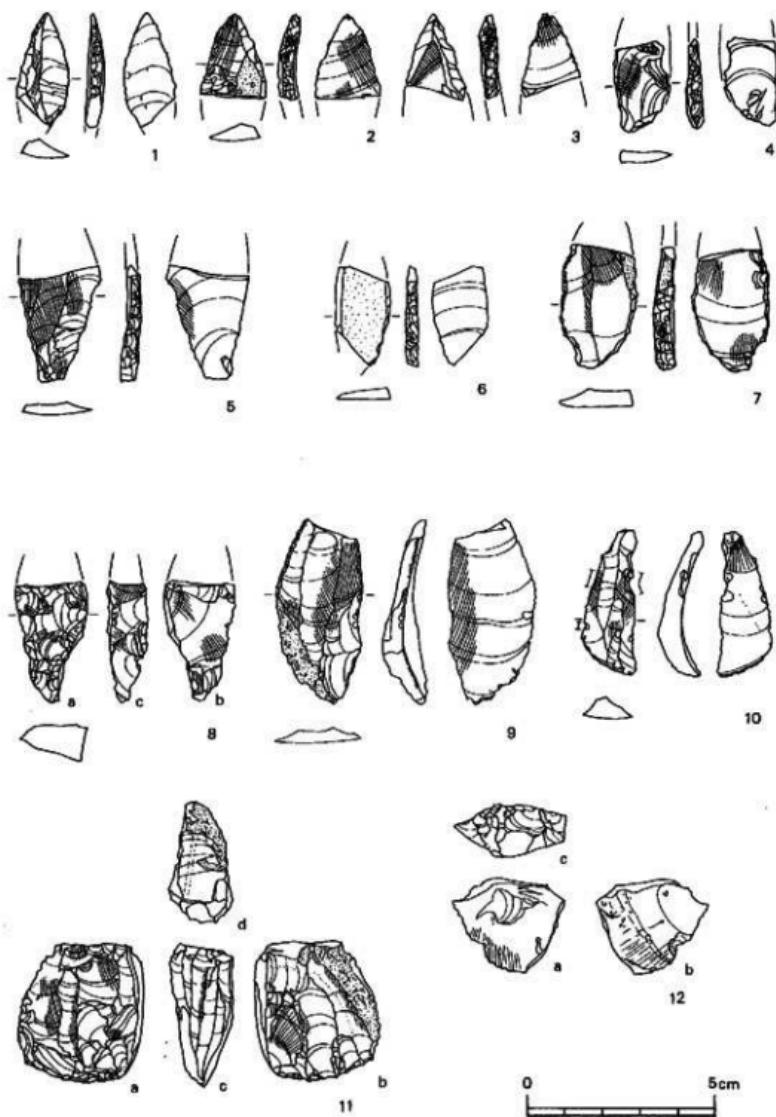


Fig.8 周辺遺跡の石器①辻田池遺跡 (2/3)

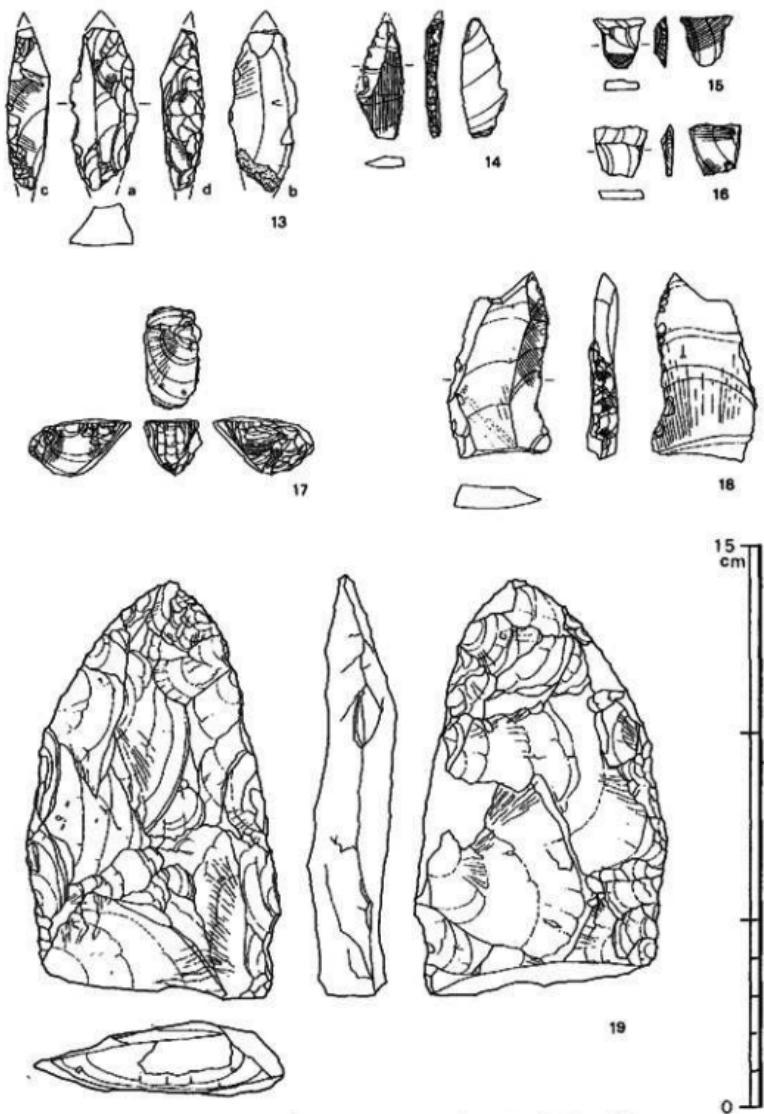


Fig.9 周辺遺跡の石器②陣ノ尾池、前田、福万角、白岳、金城遺跡 (2/3)

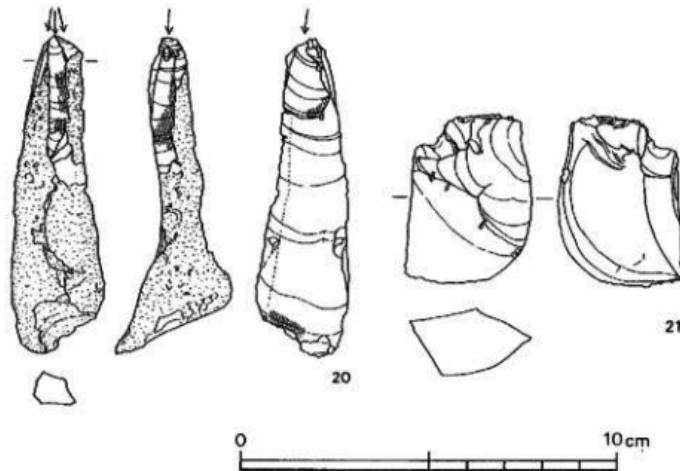


Fig.10 周辺遺跡の石器③明賀谷遺跡、七腕遺跡

でおおわれていて原礫の形状がよくわかる。この原礫は角礫であるが、この角礫の上端に打撃を加えて角の部分を落とし、この部分を素材としている。打点側の細い方の回りにグレーバーファシットを落としグレーバーとしている。

七腕遺跡 (江迎町七腕免) (Fig. 7 - 9), (Fig. 10 - 21)

標高250mラインの台地の南端に近い位置に立地する。ゆるやかな起伏をもつ草原であるために現在は牛の放牧地となっている。石器を採集した場所は、このゆるやかな起伏をもつ草原の溝んだ所に小さな溜池があり、この溜池の東側斜面からである。自然排水路の切通し面に赤褐色のローム質の土壌が露出しており、たまたま表面に出たものであろう。黒色の黒曜石製剝片を2点、灰青色の黒曜石製剝片を4点、合計7点程の剝片を表面採集した。21は、灰青色の黒曜石製剝片である。剝離の方向が一定しないところから、打点をランダムに転移していく石核から剥取されたものであろう。厚みがあり、ポジティブな面と、ネガティブな面も観察されるところから、残核かもしれない。

(村川)

6. 出土遺物 (Tab. 1~3) (Fig. 11~14)

当遺跡に於いてドッドラップで取り上げた遺物総数は101点となっている。その石器の内訳としては、ナイフ形石器3点、スクレーパー6点、使用痕ある剝片5点、打面再生剝片1点、石鎌1点、剝片72点、碎片9点、石核3点等となっている。

1~3はナイフ形石器である。1と2はいずれも上設打面の石核から剥取された小形の剝片の左右両側縁にプランティング加工を施してナイフ形石器に仕上げている。2点とも26か27.5 mmを計り小型である。3は上下端と左縁にプランティング加工を施すナイフ形石器である。1はT.P. 2, 2はT.P. 4, 3はT.P. 3からの出土である。4はエンドスクレーパーである。透明度の高い良質の不定形剝片の下端にスクレーパーエッヂを作出している。直角に近い角度の調整加土を施している。左右両側縁に使用痕も観察される。T.P. 5出土。5はコンケイブスクレーパーである。やや幅広の剝片の左位の岡右縁にコンケイブスクレーパーエッヂを作出している。下端は切削して折りとっている。T.P. 4出土。6も5と同様にやや幅広の剝片の左の岡右縁にスクレーパーエッヂを作出したコンケイブスクレーパーである。上端を折り取っている。T.P. 4出土。7はスクレーパーである。左位の岡左縁と左側の斜めになる下端にもやや内湾気味のスクレーパーエッヂがある。T.P. 4出土。8もスクレーパーである。左位の岡左縁にスクレーパーエッヂを作出している。右縁にも使用痕が観察される。T.P. 4出土。以上の5~8はいずれもT.P. 4の出土で、石材も灰青色の黒曜石製である。9は安山岩製のスクレーパーである。大きめの剝片の原礫面に大きな剝離を入れた後、主要剝離面側に周縁を加工して丸く仕上げている。左位の岡左端は折断面がある。この折断面は、最初のスクレーパーエッヂ加工を切り合い関係で、切っているので、スクレーパーエッヂ加工の後、折りとったか、折れたかしたものだろう。T.P. 7出土。10~12は使用痕ある剝片である。10は安山岩製で左位の岡右縁に細かな使用痕がある。T.P. 5出土。11は黒色の黒曜石製、12は灰青色の黒曜石製であるがいずれも左位の岡左縁に使用痕がある。11はT.P. 5, 12はT.P. 4の出土である。13は黒色黒曜石製の打面再生剝片である。上設打面の石核のものであろう。14も使用痕ある剝片である。グレーバーファシットに似た加工を施すがグレーバーファシットを落とす打面部が弱く、果たしてグレーパーとして機能するか疑問である。15~22は剝片であるが、16~18, 20~22が折断面がある。16, 17, 19, 21, 22がT.P. 4, 15, 18, 20がT.P. 2の出土である。24と25はT.P. 4出土の接合資料である。灰青色黒曜石製。もともとは上設打面の石核から剥取された剝片を折断したものであろう。26, 27, 28もT.P. 4出土の接合資料である。黒色の黒曜石製で、ランダムに打点を転移していく剝離の過程がよくわかる資料となっている。29~31は石核である。いずれも打面に打面調整を施す上設打面の石核である。29はT.P. 2の出土。30, 31はT.P. 4の出土である。

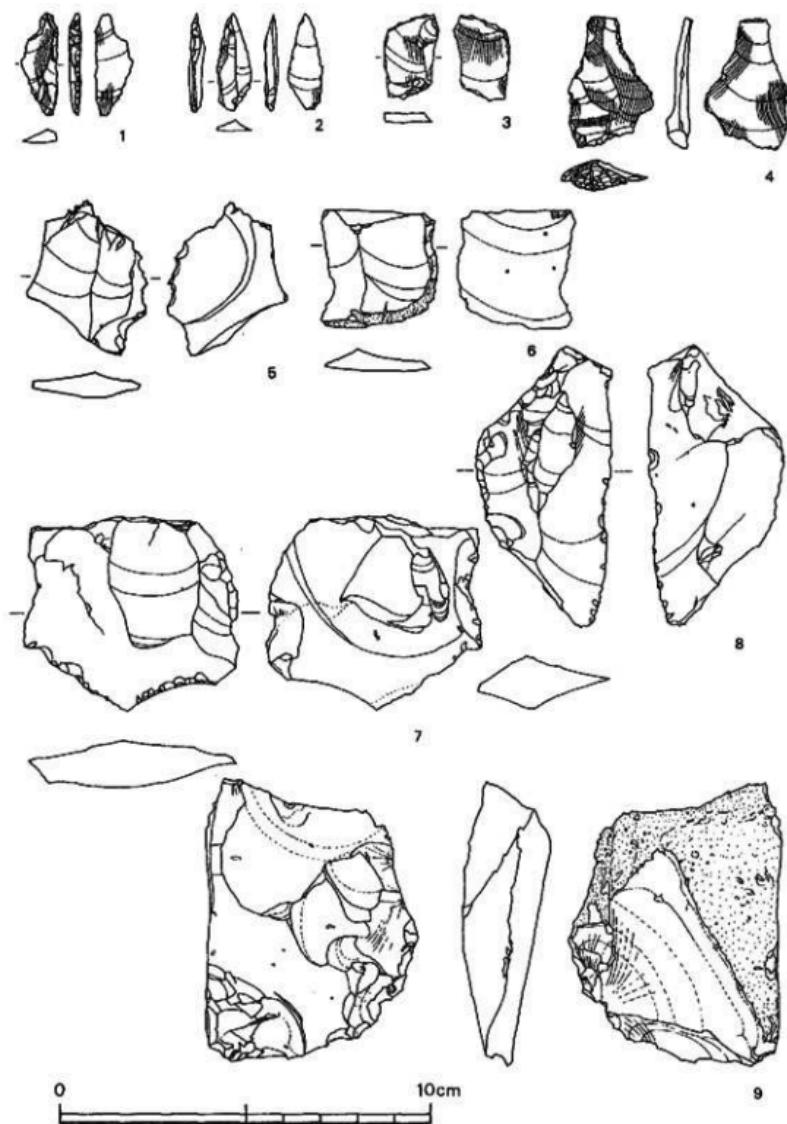


Fig.11 白岳遺跡出土の石器(①) (2/3)

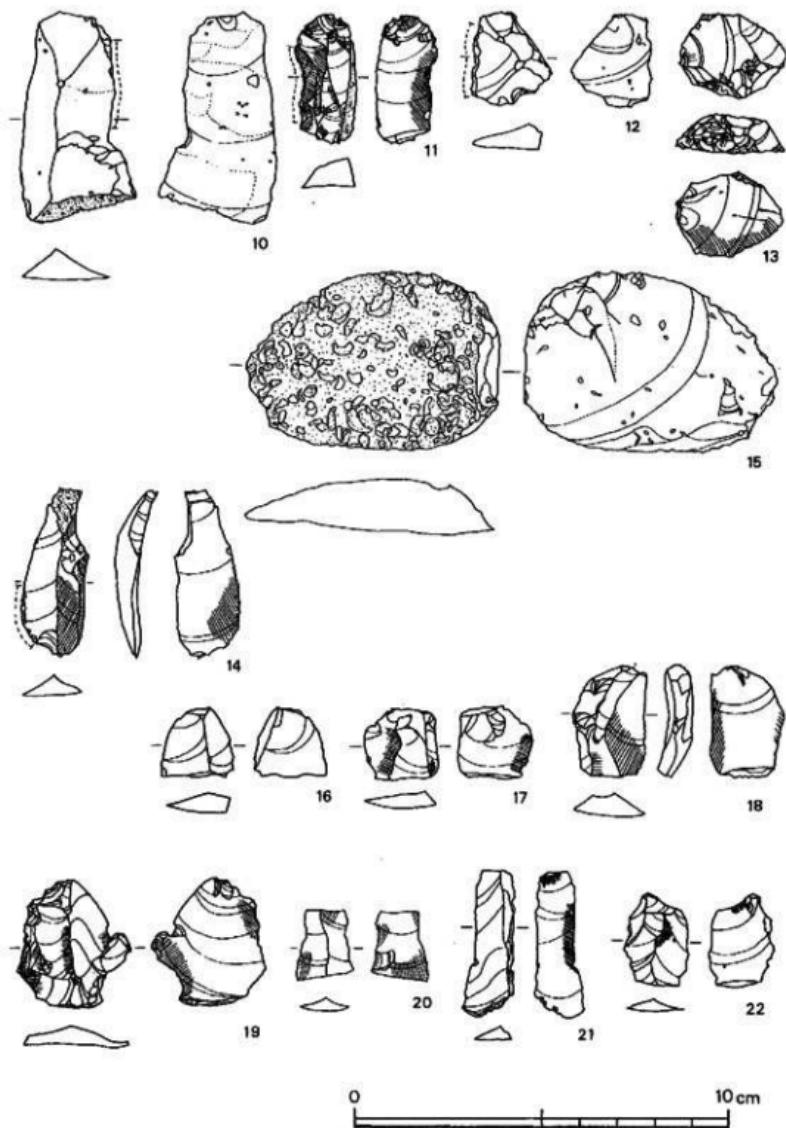


Fig.12 白岳遺跡出土の石器② (2/3)

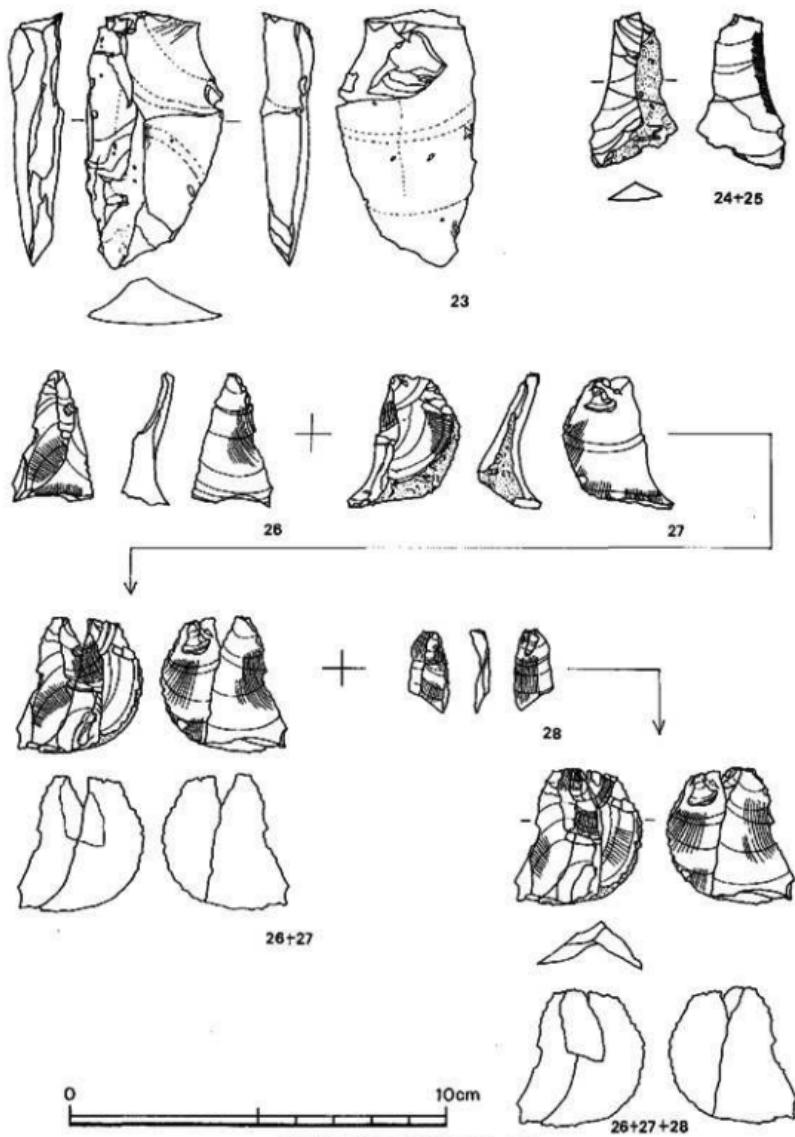


Fig.13 白岳遺跡出土の石器③ 構合資料 (2/3)

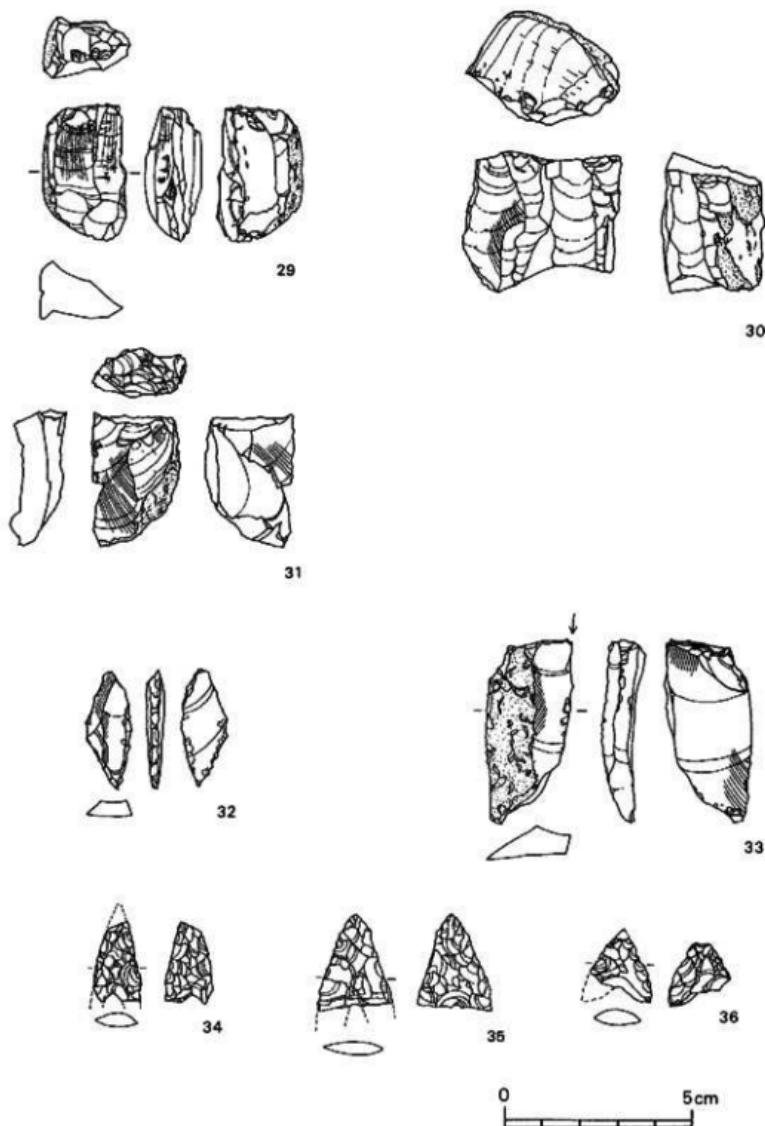


Fig.14 白岳遺跡出土の石器④ (2/3) (32, 33, 35, 36は表面採集)

表面採集の石器 (Fig. 9-17) (Fig. 13-23) (Fig. 14 32, 33, 35, 36)

(Fig. 9-17) は細石刃核である。小円礫を斜め上方から交互に剥がしていき手頃な大きさとなったものを d 面をみてわかるように長軸に対し横からの小さな剝離で打痕を取り除いている。そして、打面からの側方調整で細石刃核の形を整えている。比較的小型であるが、舟底形細石刃核の範疇に入るものだろう。(Fig. 13-23) は安山岩製の剝片である。(Fig. 14-32) は、上設打面から剥取された剝片の二側縁にプランティング加工を施してナイフ形石器に仕上げている。小型である。33は黒色黒曜石製のグレーバーである。打面を設定した後、グレーバーファシットを落としている。しっかりとつくりとなっている。34-36は石鏃であるが、いずれも先端部ないしは脚部が破損している。34は T.P. 2 の 3 層からの出土である。(村川)

7.まとめ

当遺跡に於いては、Fig. 3 の T.P. 2 の遺物の垂直分布をみてもわかるように、石鏃が混在して出土する第 3 層の下層である第 4 層からナイフ形石器、使用痕ある剝片、石核等を検出したが、ナイフ形石器の素材が小形の剝片である事と、石核のネガティブの剝離痕をみると小形である事等、両者の関連性を窺わせるものがある。もしかするとプライマリーな文化層として捉えられるのかもしれない。また、T.P. 4 に於いては 2 例の接合資料を得る事ができ、Fig. 13 の 26-28 の資料によってアトランダムに打面を転移する剝片剝離技法の一端を垣間見る事が出来た。ところで、T.P. 2, 3, 4 から 3 例の小形のナイフ形石器を検出した訳であるが、この第 4 層の中に小形のナイフ形石器文化が存在すると推察される。それで、周辺の遺跡の表面採集資料や、周辺の遺跡の発掘調査の事例に照らし合わせてみて、この遺跡の石器文化の編年的位置づけを考えみたい。

当遺跡に関連がありそうな所としては、辻田池遺跡の 7 点のナイフ形石器があるが、この資料がいざれも比較的大型であるという違いがある。また、前田遺跡では、小型のナイフ形石器と百花台型台形石器を同一場所で発見したが、周辺の遺跡の発掘事例に照合してみると、中山遺跡 3 層に小型ナイフ形石器と百花台型台形石器の共伴があり、前田遺跡と中山遺跡 3 層は、(萩原 1976), 同時期に比定される。しかし、当遺跡に於いては台形石器の出土がないのでこれも該当しない。

ところでナイフ形石器文化の大きな流れとしては、「下川連続、萩原博文の両氏により、日ノ岳遺跡、中山遺跡、提西牟田遺跡などの県北部における発掘調査をもとにその編年が示されている(下川・萩原 1983)。それによると、福井Ⅳ層→日ノ岳Ⅲ層→中山→福井Ⅲ層の変遷が示されている。そして、当遺跡に於いては小形のナイフ形石器と、Fig. 12 16, 17, 20, 22 等の資料や、Fig. 13-24 と 25 の折断資料をみてわかるように、小型縦長剝片を素材とする分割剝片が存在し、中山遺跡 3 層との関連が窺われるところから、中山遺跡 3 層の前後のどちらかの

位置が考えられるのではないだろうか。

他に県内で小形のナイフ形石器を出土する遺跡としては、佐世保市上原町に所在する上原遺跡等がある（福田1986）。

（村川）

〈註〉

1. 砕片を選別するにあたっては、1cm方眼の穴があいた型紙を準備し、その穴に通るものを碎片とした。

〈引用文献〉

萩原博文 1976 「中山遺跡」『日本の旧石器文化』(3) 所収、雄山閣

下川達彌・萩原博文 1983 「西九州における旧石器時代石器群の編年（上）・（下）」『古代文化』36-6, 36-9

〈参考文献〉

福田一志 1986 「上原遺跡」長崎県文化財調査報告書 第81集 長崎県教育委員会

Tab. 1 石器計測表 ①

器番号	器種	石材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	自然縫面の状況	備考
1	ナイフ形石器	灰青色ob	30.5	12.5	5.0	1.5	—	
2	*	漆黒色ob	22.5	17.5	6.0	1.6	平 滑	
3	*	*	22.0	15.8	5.5	1.3		
4	*	黑色ob	23.5	14.3	4.5	1.3	—	
5	*	*	30.5	22.0	6.0	2.4	—	
6	*	*	26.5	15.0	3.5	1.4	平 滑	
7	*	*	32.8	20.5	6.0	3.9	*	
8	不明石器	漆黒色ob	32.0	19.0	11.0	5.0	—	
9	使用痕ある剥片	黑色ob	49.0	23.5	12.0	7.4	円 滑	
10	*	*	38.5	19.0	12.0	2.5	—	
11	細石刀核	*	37.5	33.5	17.0	18.9	円 滑	
12	打面再生剥片	灰青色ob	25.5	30.0	14.0	7.0	—	
13	尖頭状石器	*	43.0	18.0	11.5	8.0	—	
14	ナイフ形石器	黑色ob	32.0	12.5	5.0	1.2	—	
15	台形石器	*	13.5	13.8	3.0	0.5	—	
16	台形石器?	*	14.0	14.0	3.0	0.5	—	
17	細石月核	*	15.5	27.0	16.0	5.3	円 滑	
18	ナイフ形石器	*	50.0	28.0	8.0	9.4		ob中に白や黄の不純物
19	尖端器	サヌカイト	113.0	68.0	24.0			

器番号	器種	石材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	層位	ハナリ	冠縫面	折面	備考
15 TPI-1	剥片	灰青色ob	48.0	68.0	14.5	44.2	3層	○	+		
2	打面再生剥片	黑色ob	23.5	28.1	9.0	4.7	*				
3	剥片	*	14.4	9.8	1.6	0.2	*				
4	*	安山岩	29.3	27.4	7.0	5.6	*				
TPI-1	剥片	黑色ob	19.0	15.3	2.0	0.5	2層		○		
2	*	*	20.6	14.0	2.9	0.7	*				
3	*	*	19.5	10.5	4.0	0.8	3層		○		
4	*	安山岩	20.2	19.9	4.0	0.7	*				
5	使用痕ある剥片	*	33.6	15.4	6.8	2.1	*				
6	剥片	灰青色ob	26.0	12.4	5.3	1.1	*				
7	*	黑色ob	6.0	5.8	1.6	0.05	*				
8	*	*	15.0	7.6	4.3	0.4	*				
9	石器	*	22.0	13.0	3.5	0.8	*				
10	剥片	灰青色ob	29.8	14.0	8.4	2.9	*		○		
11	*	黑色ob	22.6	10.8	5.0	0.8	*		○		
12	石核	*	34.8	21.8	15.0	12.5	4層				
13	剥片	*	15.0	13.2	2.2	0.4	*		○		
14	*	*	20.4	11.4	4.2	0.5	*				
15	*	*	23.4	19.1	7.1	3.4	*				
16	ナイフ形石器	*	27.5	10.0	3.5	0.7	*				
17	剥片	*	15.6	12.0	1.8	0.3	*				しま模様あり

Tab. 2 石器計測表 ②

番号	造形 SK	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	層位	ハサイナ	空洞面	折断	備 考
20	TP2 -18	刮 片	黒色ob	11.0	10.5	2.4	0.3	4層				しま模様あり
20	19	*	*	19.0	15.0	3.5	0.8	*			○	半透明
20	*	*	安山岩	25.2	12.0	6.4	1.6	*	○	○	○	
21	チ フ フ	黒色ob	9.8	9.4	2.0	0.1	*					
22	刮 片	*	*	14.4	10.2	2.2	0.2	*				
23	*	*	*	12.6	12.1	2.3	0.3	*			○	
24	*	*	*	14.1	7.0	1.6	0.1	*				
25	*	*	*	17.0	12.3	2.5	0.5	*	○	○	○	
26	*	*	*	20.9	9.0	2.2	0.2	*				
27	チ フ フ	*	*	9.2	8.5	3.6	0.2	*				
28	刮 片	*	*	16.8	11.2	1.9	0.3	*				
29												
	TP3 -1	刮 片	黒色ob	16.4	13.4	1.2	0.2	4層				透明
3	2	ナイフ形石器	*	22.5	15.0	2.5	1.2	*	○			
3	3	刮 片	*	19.2	11.1	0.9	0.2	*				
14	TP4 -1	使用痕ある刮片	黒色ob	44.6	16.7	6.6	3.6	4層				
2	2	刮 片	*	17.0	13.0	5.5	1.0	*	○			
3	3	*	灰青色ob	17.7	7.1	2.7	0.2	*				
5	4	コンケイフ スクレーパー	*	41.0	32.5	7.0	6.8	*			○	
27	5	刮 片	黒色ob	36.5	20.5	12.0	6.7	*	○			26と接合
31	6	台 検	*	35.4	25.2	13.6	9.2	*	○			
7	7	刮 片	*	15.3	8.7	2.1	0.2	*				
8	*	*	灰青色	24.0	17.3	4.0	0.9	*				
9	*	*	*	22.0	15.9	2.6	0.7	*				
10	*	*	*	26.0	14.6	2.1	0.9	*				
11	*	*	*	31.8	13.9	2.1	0.8	*				
12	*	*	黒色	17.7	13.7	2.6	0.6	*	○		○	
13	*	*	*	25.1	12.9	6.0	1.6	*	○			
17	14	*	灰青色	19.0	20.0	4.5	1.8	*			○	
15	*	*	*	32.0	9.7	4.7	1.3	*	○			
16	*	*	黒色	12.9	11.5	3.0	0.3	*				
25	17	*	灰青色	40.5	23.5	5.0	2.4	*				31と接合
18	*	*	黒色	15.7	12.6	1.7	0.2	*				透明
16	19	*	灰青色	18.5	19.5	5.5	1.8	*	○			
20	*	*	*	22.0	12.6	3.3	0.7	*	○			
30	21	台 検		40.0	36.5	25.4	46.0	*				
22	刮 片	安山岩	30.0	22.6	6.5	3.4	*					
23	チ フ フ	灰青色			4.0	0.2	*					
7	24	スクレーパー	*	52.0	58.0	12.5	38.3	*				
25	刮 片	*	*	21.4	16.1	6.0	1.4	*				
28	26	*	黒色	21.1	10.5	4.0	0.6	*				5と接合
2	27	ナイフ形石器	*	26.0	9.0	3.0	0.5	*				
28	刮 片	灰青色	23.3	10.7	1.6	0.4	*					
29	*	黒色	16.3	12.4	4.4	0.8	*			○		

Tab. 3 石器計測表 ③

試験番号	遺物 No.	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	剖位	バタイナ	原地盤	折断	備 考
	TP4 -20	チップ	黒色ob	10.5	10.2	1.7	0.2	4層				
24	31	剥 片	灰青色ob	40.5	23.5	5.0	1.4	+				17と接合
	32	*	黒色ob	38.6	22.0	3.3	2.4	+				
6	33	コンティニアススレーパー	灰青色ob	31.5	31.5	6.0	6.0	+	○	○		
	34	剥 片	*	13.3	11.0	3.6	0.5	+				
	35	*	*	18.5	9.8	2.7	0.5	+				
	36	*	*	16.4	15.4	5.6	1.1	+		○		
12	37	使用痕ある剥片	*	25.0	21.0	6.5	2.5	+				
	38	剥 片	*	26.0	8.9	4.2	1.0	+		○		
19	39	*	黒色ob	33.5	31.0	6.0	4.8	+				
	40	*	灰青色	11.5	8.6	2.4	0.2	+				
	41	チップ	*	8.8	7.3	1.4	0.2	+				
	42	剥 片	黒色ob	16.8	9.7	1.7	0.3	+				
	43	*	*	14.9	9.7	3.0	0.5	+				
	44	*	*	34.0	21.4	10.1	3.4	+				5・26と接合
26	45	*	灰青色ob	17.1	9.0	2.0	0.3	+				
	46	チップ	*	10.1	8.3	1.2	0.2	+				
21	47	剥 片	*	39.0	13.5	3.5	1.7	+				
	48	*	黒色	12.5	9.7	3.3	0.3	-+				
	49	*	灰青色	15.6	12.2	1.7	0.4	+		○		
	50	チップ	*	8.2	5.2	2.4	0.1	+				
	51	剥 片	*	14.4	11.5	2.7	0.5	+				
	52	チップ	黒色	10.0	5.9	1.6	0.2	+				
	53	剥 片	灰青色	16.8	7.5	1.5	0.2	+				
	54							+				
	55	剥 片	灰青色	18.4	15.0	3.7	1.0	+	○	○		
8	56	スクレーパー	*	75.5	36.0	14.5	29.8	+				
22	57	剥 片	*	24.5	17.5	3.5	1.2	+			±	
	58	*	*	12.4	11.5	2.0	0.4	+				
10	TP5 -1	使用痕ある剥片	安山岩	56.0	31.0	8.5	12.1	+		○		
11	2	*	黒色ob	34.0	16.5	8.0	4.8	+	○	○		
4	3	エンタスクレーパー	*	35.6	23.0	5.3	2.6	+				
	TP6 T1	剥 片	黒色ob	11.5	10.6	2.2	0.2	+				
	T2	チップ	*	10.8	10.0	1.5	0.2	+				
	3	剥 片	*	14.1	11.2	2.4	0.3	+				
9	TP7 H1	スクレーパー	安山岩	76.0	57.7	20.4	89.3	+		○		
H-1				31.5	12.5	4.0	1.3					
2				47.5	23.5	9.0	9.5					
3							0.6					
4				26.0	20.0	3.5	1.3					
5				16.5	16.5	4.0	1.0					

PLATES

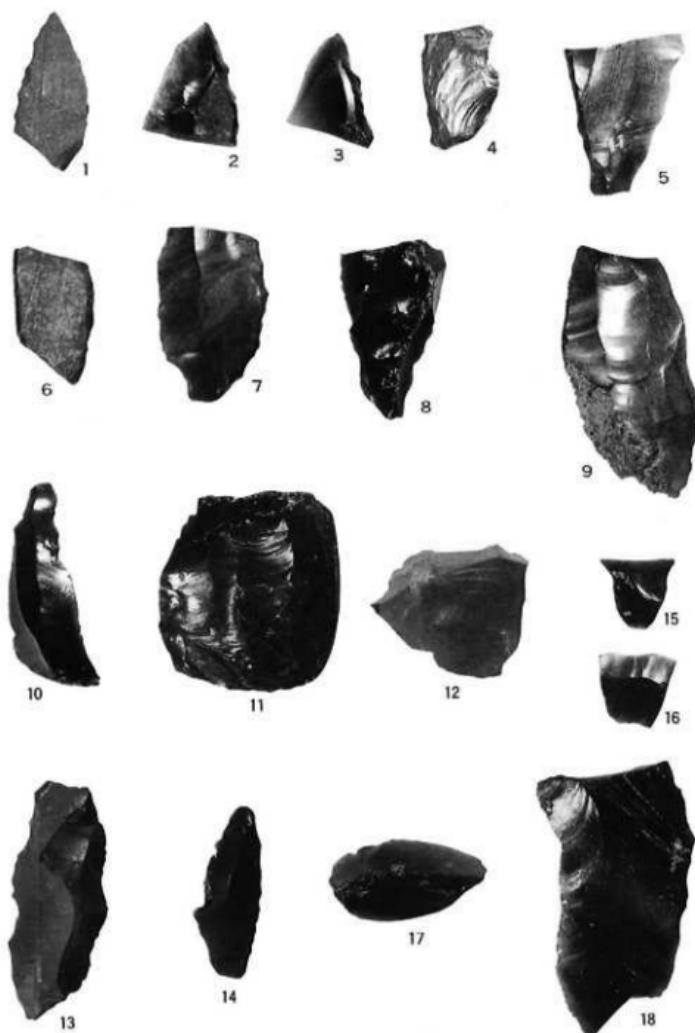
II 白岳遺跡



遺跡遠景



遺跡近景



周辺遺跡の石器① (1/1)



19

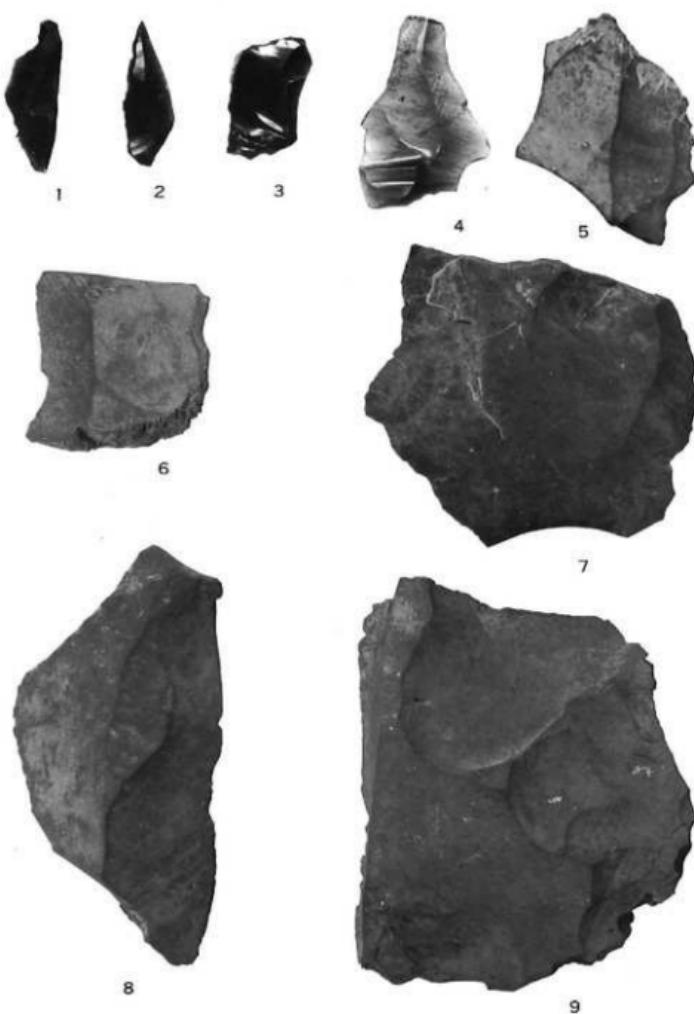


20

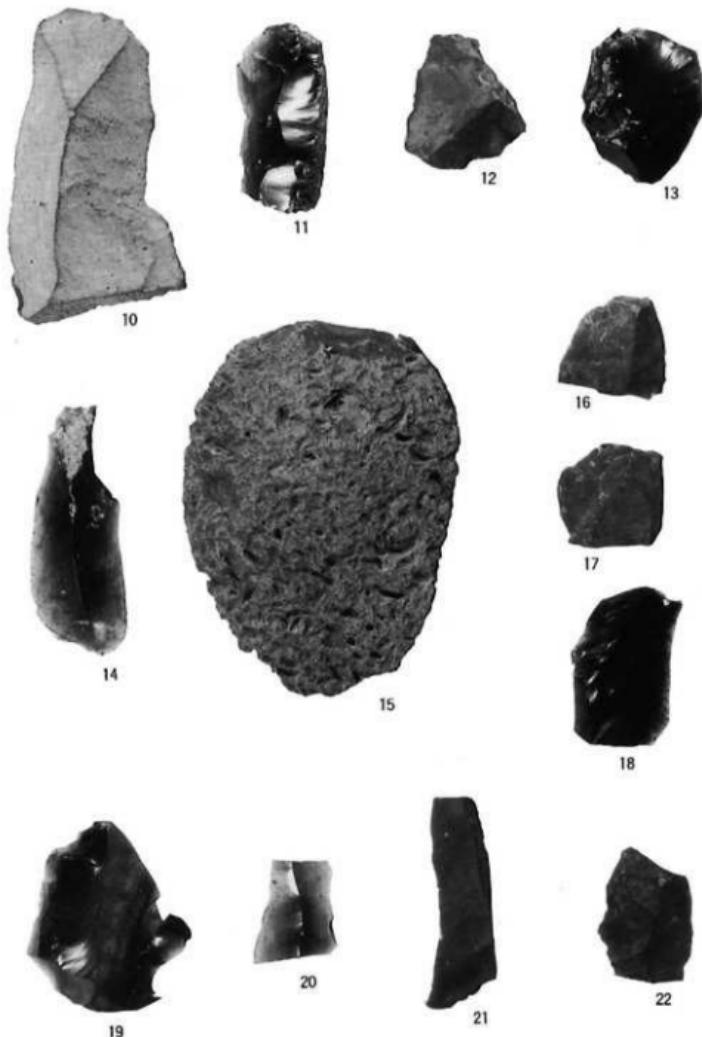


21

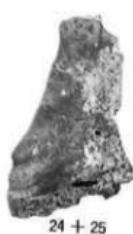
周辺遺跡の石器② (1/1)



白岳遺跡出土の石器① (1/1)



白岳遺跡出土の石器② (1/1)



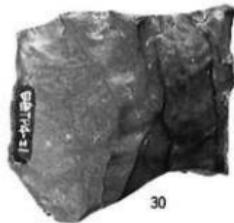
24 + 25



26 + 27 + 28



29



30



31



32



33



34



35



36

III ひとの野 遺跡

—— 南高米郡有明町所在 ——

例　　言

1. 本書は南高米郡有明町大三東一野に所在する一野遺跡の測量調査の結果報告書である。
2. 調査は昭和52年5月30日～同年6月3日（5日間）まで、長崎県教育委員会が有明町教育委員会の協力を得て実施した。
3. 現地調査は長崎県教育庁文化課 副島和明（現主任文化財保護主事）永松 実（現長崎市教育委員会）が担当した。
4. 整理作業は広川裕子、富田知江（整理補助員）が行い、本文執筆は副島が担当した。
5. 本書の編集は副島による。

本文目次

1. 調査に至る経過	87
2. 立地環境と周辺遺跡	87
3. 遺跡の概要	95
4. おわりに	96

挿図目次

Fig. 1 一野遺跡地形図 (1)	86
Fig. 2 有明町遺跡地図	89
Fig. 3 一野遺跡地形図 (2)	94

図版目次

PL. 1 一野遺跡近景 (石棺・妻棺墓出土地点)	99
PL. 2 一野遺跡近景	100
PL. 3 一野遺跡 (石室)	101
PL. 4 一野遺跡 (人骨出土状況)・(石室発見状況)	102
PL. 5 小原下遺跡・中田遺跡	103
PL. 6 松尾遺跡	104
PL. 7 妙法塚遺跡 (A地点)・景華園遺跡 (島原市)	105

表目次

Tab. 1 遺跡地名表	88
--------------------	----



Fig.1 一野遺跡地形図（1）

1. 調査に至る経過

南高来郡有明町大三東一野に所在する一野遺跡は、大正初期の島原鉄道（諫早～島原間）の建設工事の際に石棺、鏡、鐵器、土器類が出土したことが伝えられ、昭和27年に九州毛織工場建設予定地の造成中にも、箱式石棺が数基見つかっている。^(註1)

昭和34年の諫早～島原間2級国道建設工事^(註2)中に、箱式石棺・甕棺や弥生～古墳時代の遺物が発見されている。

昭和38年には、林田かつよ氏の宅地造成工事（有明町大三東甲709の1、甲762）に伴って発掘調査が実施され、甕棺1基・箱式石棺2基・土壙墓1基の遺構群と弥生式土器片が出土している。^(註3)また、島田弥士男氏の宅地造成工事中に石棺の上より土師器が2点出土している。

昭和52年5月に種村俊八郎氏所有の烟地より農作業の際に、古墳の石室が発見され、県文化課と町教育委員会と地上と三者で協議を行い、現状のまま埋め戻して保存することになった。また、遺跡周辺の開発が頻繁に行われる状況下で、詳細な地形測量を実施することになった。

註1 初村達章、内村闇雄、古田正隆「一野遺跡概報」(長崎県南高来郡有明町大三東)

長崎県島原土木事務所報告 1960

註2 1に同じ

註3 古田正隆「一野遺跡」(南高来郡有明町) 長崎県南高来郡有明町教育委員会 1964

註4 3に同じ

古田正隆「弥生埋葬地発見に関する件報告」 1964

註5 古田正隆「一野遺跡石棺発見調査報告書」 1964

2. 立地環境と周辺遺跡

島原半島の中央に善賀岳（1359m）を主峰に国見岳、妙見岳、野岳などの雲仙岳火山体が聳え、周囲に山麓地を形成している。^(註6)

舞岳（702m）北部は湯江川によって、百花台と礫石原山麓地に分れ、湯江川と西川間の礫石原山麓地は小河川が流れているが、他地域ほど沖積地の形成は乏しいようである。

一野遺跡は礫石原山麓地の先端部の低丘陵上に位置し、標高17～24m程に当り、丘陵の両側を江川と金洗川が流れ、有明海に注いでいる。

遺跡の分布面積は南北200m、東西450mの約90,000m²の範囲に渡り、縄文時代早期、後・

(註7)
晩期の遺物包含地、弥生～古墳時代の墳墓群および奈良時代にかけての生活跡等の複合遺跡である。

Tab. 1 遺跡地名表

番	遺跡名	所在地	時代	種別	遺構・遺物	備考
1	戸田向原遺跡	有明町戸田字向原		櫛・鉄 包含地		縄文残片
2	釣崎遺跡	◆ ◆ 字城台	中世	城 路	空堀らしきものあり	平山城
3	清水山遺跡	◆ ◆ 字清水山	縄 文	包含地	绳文早期(押型文土器)	
4	森岡遺跡	◆ ◆ 字構道		◆ ◆	縄文早期(押型文土器)	
5	二ツ石遺跡	◆ ◆ 字地道辻		◆ ◆		
6	妙法塚遺跡	◆ 清田名字妙法塚 ・折地、松下	弥生・古墳	墳 墓	壇柱、石室 弥生式土器、人骨、铁鏃	註16
7	中田池遺跡	◆ 清田名字中田池	縄 文	包含地	萬文晚期(押模式、風川式土器)	註14
8	大野浜城跡	◆ 久原名字向原	中世	城 路		「鳥原大楳様子書」、平山城
9	平山古墳	◆ ◆ 字後久原	古 墓			円墳
10	大野城跡	◆ 大野名字城山	中世	城 路	空堀	日本城郭大系17 佐賀・長崎
11	大野原跡	◆ ◆ 宇東、西 南、北大野原	備 併 包含地		壇柱、土壁、石蓋土壙墓	
12	甘木遺跡	◆ ◆ 字甘木、門前	弥・古	包含地	弥生式土器、黑曜石製器片	
13	上松高野遺跡	◆ ◆ 宇上松高野堂ノ元	弥 生	◆	弥生式土器	
14	下源在高野遺跡	◆ ◆ 字下源在高野		◆ ◆	縄文早期(押型文土器)	
15	上源在高野遺跡	◆ ◆ 字上源在高野		◆ ◆	縄文早期(押型文土器)	
16	東空開跡	◆ 東空開名字占城ノ元能	縄 文	城 路	中後(青磁、瓦質・土師質土器) 縄文中期(押型文土器)、 縄文晚期(浮型文土器)	日本城郭大系17 佐賀・長崎 「島原大楳様子書」、昭和59 年町教委誌附録
17	才木遺跡	◆ ◆ 字馬場	縄 文	包含地		
18	小原下遺跡	宇大三東2844地		◆ ◆	縄文後・晚晴()	註13
19	小原上遺跡	◆ 三之沢名字小原		◆ ◆	縄文早中期(押型文土器)	
20	松尾遺跡	◆ 松尾名字松尾	古・奈	◆	註六詳	私家書・有明町教育委員会 1978
21	山ノ内遺跡	◆ 三之沢名字松崎上地		◆ ◆		
22	一野遺跡	◆ ◆ 字野田、堂ノ前 下一野・鼻ノ崎	縄・古 奈良	包含地	縄文早期・後段期・弥生式土器、 須恵器、鐵器 石棺、壇柱、土壙、古墳	本書収録 註1～5
23	上一野遺跡	◆ ◆ 字上・對地	縄 文	包含地	縄文早期(押型文土器)	
24	折ノ久保遺跡	◆ ◆ 字折ノ久保		◆ ◆	縄文早期(押型文土器)	
25	幽石原遺跡	◆ 大野名字・本松高野	◆	城 墓	配石遺構、縄文早・中期 (押型文土器、横石垣式土器)	註12 島原市にもまたがる
26	久原港跡	有明町	縄 文	包含地		
27	山ノ内上櫻穴	◆	古 墓	墳 墓		
28	温泉神社遺跡	◆	縄 文	包含地		
29	六人遺構穴	◆	古 墓	墳 墓		
30	一本松遺跡	◆	縄 文	包含地		
31	拂山構穴	◆	古 墓	墳 墓		
32	庄司塙前遺跡	◆	中世	包含地		
33	小原下B遺跡	◆	縄 文	◆		
34	御所在地遺跡	◆	古 墓			
35	塔ノ森構穴	◆	古 墓	墳 墓		
36	庄司塙前構穴	◆	◆ ◆			
37	庄司塙前古墳	◆	◆ ◆			

詳細については不明

有明町全図



Fig. 2 有明町全図

一野道跡

有明町には先土器時代から中世に至る遺跡が37箇所程知られ、隣接する島原市・国見町にも108箇所の遺跡が確認されている。^(註8)

国見町に所在する百花台遺跡群の調査が県立広域公園建設や県道国見～雲仙線改良工事に伴う発掘調査など、昭和38年より数次に渡り実施され、第Ⅱ層～第Ⅴ層まで5枚の文化層が検出されている。また、第Ⅵ層下部に広域火山灰である姶良A T火山灰（姶良カルテラ 約21,000年～22,000年前）が検出され、ナイフ形石器を主体とする石器群から細石器を主体にする石器群の層位的な変遷が明らかにされた。同様に第Ⅲ層～第Ⅴ層に縄文時代の早期、前期、晩期の遺物が出土し、早期には集石・が穴造構に押型文土器、塞ノ神式土器と石錐、石槍などの石器類が出土し、前期の曾畠式土器と石器類、装身具類などと石斧集積造構や礫群が検出されている。晩期の礫石原式（黒川式）土器が出土し、広範囲な分布を示すなかで、生活の場の変遷が明らかになりつつある。また縄文後・晩期の筏遺跡（国見町）、縄文早・晩期の礫石原遺跡（島原市・有明町）、や弥生時代～奈良時代にかけての墳墓群である景華岡遺跡（島原市）などの調査が実施されている。^(註9)

有明町に所在する縄文時代の遺跡は礫石原遺跡、清水山遺跡、森岡遺跡、東空閑遺跡など縄文早期の遺跡が11箇所、中田遺跡、小原下遺跡、疊石原遺跡などの縄文後・晩期の遺跡が6箇所程の縄文時代の遺跡が知られている。

弥生時代～古墳時代の遺跡は妙法塚遺跡A・B地点、一野遺跡、平山古墳など15箇所で、墳墓群や古墳がほとんどである。

奈良時代～中世の遺跡は松尾遺跡や釣崎城跡など8箇所である。

上記の中で発掘調査が実施された遺跡についての概略を記すことにする。

疊石原遺跡——昭和30年の島原市教育委員会の調査から昭和35・36年の日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会の発掘調査まで数次に渡り実施され、昭和35年10月に「疊石原県民憩の広場」の建設工事で遺跡の一部が破壊され、同年11月に長崎県教育委員会は調査を実施した。

遺跡は標高240～350m程の山麓地に位置する。遺跡の範囲は島原市が大部分を占め、有明町にかけて広大な分布面積を示す。

方形石組造構、甕棺、石棺などの造構と藏骨器が検出され、遺物は縄文早期の押型文土器、塞ノ神式土器と石器類、縄文後・晩期の西平式土器、三万田式土器、疊石原式土器（黒川式）と打製石斧などの石器類が出土しているが、遺構・遺物等詳細な調査報告書の刊行がたまられる。^(註10)

小原下遺跡——昭和41年に縄文後期の土器片が発見され、農作業による遺跡の損壊のために昭和41年12月～昭和42年1月にかけて、有明町教育委員会は緊急発掘調査を実施した。

昭和45年の東洋機工製作所の工場用地造成で遺跡の一部が削平および埋上された状況下で、同年11月に隣接畠地の発掘調査が長崎県教育委員会と有明町教育委員会で実施された。

遺跡は標高17～25m程の丘陵部に立地し、炉状遺構（昭和41年に検出された製鉄遺構とされている）およびピット群の造構と縄文後・晩期の西平式土器、三万田式土器、脚領式土器と剝

片鐵や打製石斧、打製石棺などの石器類と鉄滓が出土している。

時期は縄文後・晚期、古墳時代、中世に亘る複合遺跡である。

^(註14) 中田遺跡——昭和32年に発見され、昭和58年6月に個人宅地造成工事に伴って緊急発掘調査が有明町教育委員会で行われた。

遺跡は標高10~20m程の丘陵上に位置し、広範囲に分布する。

弥生時代の甕棺1基と縄文後・晚期の御領式土器他と打製石斧などの石器類と共に石鍋、須恵器、土師器が出土している。

^(註15) 大野原遺跡——昭和43年に農作業中に合口甕棺1基が発見され、同44年に国見高校社研部が発掘調査を実施した。昭和59・60年に有明町史編纂事業の一環として、昭和44年の調査地を中心に大野原遺跡調査団で発掘調査が行われた。

遺跡は標高18m程の丘陵上に位置する。

構造は巨石蓋土塚墓（土壇は直径1.5mの橢円形状を呈し、深さ0.4m程で弥生前中期から中期初頭頃の土器が副葬されている）、甕棺8基（弥生中期～後期）、数基の土塚墓等が発見され、縄文後・晚期の三万山式土器、御領式土器、礫石原式土器と弥生中期～後期の土器・石器、古墳時代の須恵器、土師器と石器類、鉄器類が出土している。

弥生～古墳時代にかけての墳墓地域であり、縄文～古墳時代にかけての生活跡であろう。

^(註16) 妙法塚遺跡——昭和49年10月に島原海苔本舗工場敷地造成工事で、古墳の石室が半壊された状況で発見され、現状のまま保存されることになったが、後日一方的に破壊された（A地点）。

更に同造成地で甕棺1基が発見され、昭和50年5月に長崎県教育委員会が緊急発掘調査を実施した（B地点）。

A地点の古墳は箱式石棺の葬法から古墳葬法への移行する過渡期的なものとされ、石室の構築法および副葬品の鉄鏃2本より、5世紀前半に比定されている。（また、石室より1体の女性人骨が検出されている）

遺跡は標高5~10m程の丘陵先端部に位置し、丘陵の北側は国道251号線で削られ、南側は島原鉄道で一部破壊されている。

A地点の石室残存部の堆積計測値は室長約0.6m、室幅約0.5m、室高約0.7mで、封土は無く、B地点の甕棺は弥生中期の壺棺が1基検出されている。

弥生～古墳時代にかけての墳墓地域と考えられる。

^(註17) 松尾遺跡——昭和53年6月に有明町松崎名字松尾の個人宅地造成工事中に須恵器、土師器等が発見され、同年8月に緊急発掘調査が県教委と有明町教委で実施された。

遺跡は標高約10m程の丘陵上に位置し、国道251号線で分断されている。

100個以上の柱穴群と土壇7基の遺構と須恵器、土師器、青白磁片、石鍋が出土。

時期は古墳時代末（7世紀）～中世（12世紀）の生活跡が明らかになった。

- 註6 長崎県土地対策室「長崎県南部地域総合開発地域土地分類基本調査」島原・荒尾 1976
- 註7 註1～5参照
- 註8 長崎県教育委員会による遺跡分布調査結果および古田正隆氏の御教示による。
- 註9 長崎県教育委員会「百花台遺跡」長崎県文化財調査報告書 第78集 1985
同志社大学考古学研究室、長崎県立国見高等学校、国見町教育委員会「百花台1982」
第4次発掘調査概報 1983
- 註10 古田正隆「筏遺跡発掘調査報告」長崎県立国見高等学校社研部、国見町教育委員会 1969
古田正隆「筏遺跡」一編文後・晩期の埋蔵遺跡— 百人委員会埋蔵文化財報告
第4集 百人委員会 1974
- 註11 古田正隆「三会中野景華園遺跡」
- 註12 古田正隆「礫石原遺跡」一編文晚期農耕生産文化の姿相— 百人委員会埋蔵文化財報告
第7集 百人委員会 1977
- 註13 古田正隆「小原下遺跡報告(第一次発掘調査)」—長崎県南高来郡有明町大三東に所在する—
長崎県立国見高等学校 1967
正林 誠「小原下遺跡」 南高来郡有明町所在 「長崎県埋蔵文化財調査集報」 雜
長崎県文化財調査報告書 第67集 長崎県教育委員会 1984
- 註14 古田正隆「中庄遺跡図録」—卵領式(後5・6類)の単純遺跡— 百人委員会埋蔵文化財報告
第8集 百人委員会 1977
古田正隆・塙田元久「南高来郡有明町大三東中川遺跡の報告」島原高等学校郷土部 1958
- 註15 有明町教育委員会・大野原遺跡調査団「大野原遺跡調査概報」有明町埋蔵文化財調査報告書
第2号 1984
古田正隆「大野原遺跡の一帯地図変更に伴う研究調査報告」有明町埋蔵文化財調査報告書
第6号 大野原遺跡調査団・有明町教育委員会 1986
- 註16 長崎県教育委員会「妙法塚遺跡」「長崎県埋蔵文化財調査集報」長崎県文化財調査報告書
第45集 長崎県教育委員会 1979
- 註17 安楽 勉(長崎県文化課)の御教示による。
- 註18 北九州市教育委員会「東宮ノ尾古墳群」北九州市文化財調査報告書 第14集 1974
- 註19 前掲註13の中で「昭和41年3月に長崎県教育委員会・島原市・有明町教育委員会で、一野遺跡の調査が実施された際に板状石積の石室が発見され……跡形もない」と報告されている。

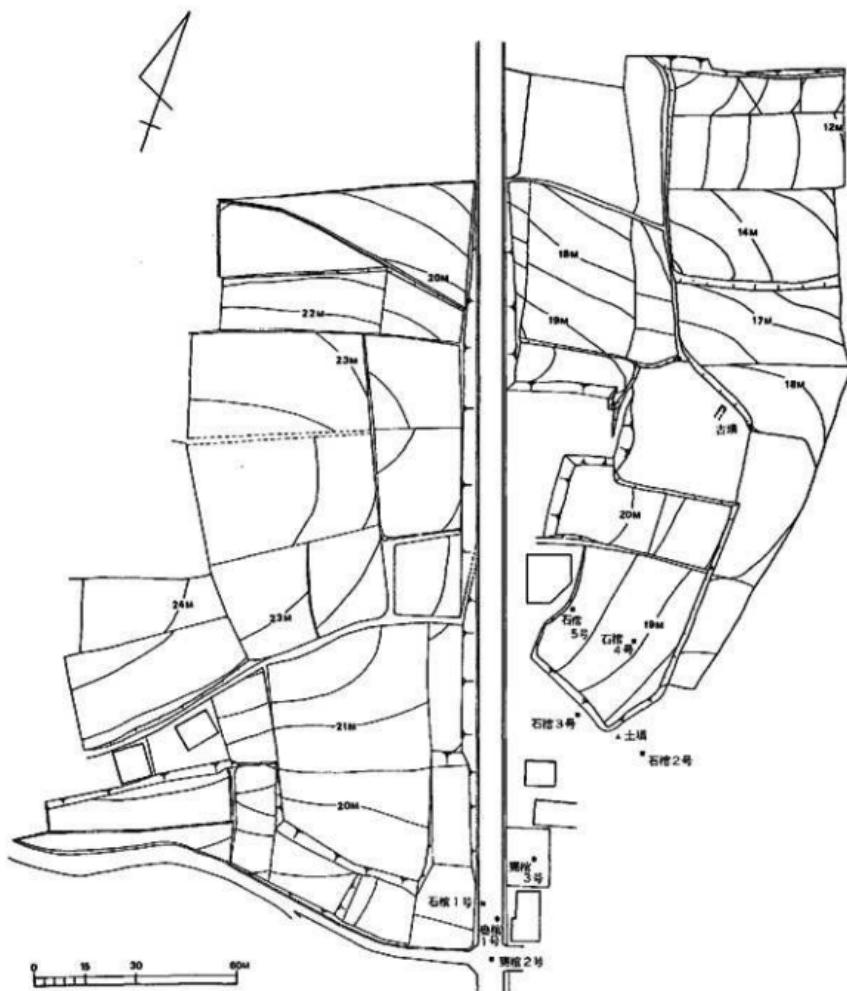


Fig. 3 一野遺跡地形図 (2)

3. 遺跡の概要

先に記したように、一野遺跡および周辺地域は大正初期の島原鉄道建設工事から昭和34年の国道建設、宅地造成工事等で弥生～古墳時代の墳墓群が多数発見されている。

○昭和34年の国道建設工事関係

造構は箱式石棺1基、妻棺2基が発見されている。

石棺1号の規模は東西約1.5m、南北約1m、深さ約0.6mの長方形状で、砂岩質系の割石を利用したものとされ、詳細については不明とされている。

妻棺1号は当時は弥生式土器と考えられていたが、古式土師器である。検出状況は主軸を東南にとり、表土・褐色ローム層を約1m程掘り下げ、約30度の傾斜角度で埋置されていたと報告されている。

妻棺2号は弥生中期に比定されるとされているが、詳細は不明である。

以上の造構群の中で、鉄器と土器の若干が石棺に副葬されていたらしいが、出土状況等は不明である。

その他の遺物は土師器、須恵器が多数採集されている。また鉄器は直刀1点、刀子1点、鉄鎌3点、轡が2点出土している。

これらの時期は妻棺2号は弥生中期、妻棺1号は4世紀末～5世紀初頭、石棺は7世紀頃に比定されている。

○昭和38年の宅地造成工事関係

工事中に発見されたために緊急発掘調査が実施され、妻棺1基、石棺4基、土壙1基の造構が検出されている。

石棺2号は主軸を東西とし、長径約1.5m、幅0.6mで、板状石と自然石を組み合せたものとされ、蓋石と側石は工事中に持ち去されていたとされる。

石棺3、5号はすでに破壊され、5号については蓋石の上に土器が2点置かれた状況で発見されたらしいが詳細は不明とされている。

石棺4号は主軸を南北とし、長径約1.15m、幅0.4mで、棺材は自然石を利用。

妻棺3号の出土状況は不明で、妻は弥生後期。

土壙は径1m、深さ0.7m程の円形状を呈し、弥生中期の壺や土器片が出土している。

以上のように、工事が進行して詳細な記録処置がなされる前に破壊されているが、石棺は板状石と自然石および自然石のみを利用したもので、7世紀代。妻棺は弥生後期の時期に比定されている。その他、弥生式土器、土師器等が採集されている。

○昭和52年の石室（古墳）の発見について

農作業の際に古墳の石室の一部が露出したので、現地踏査および遺跡の範囲についての地形測量を実施したものであるが、石室の詳細な実測図は記録せず、将来の再調査の段階で記録処置を取ることで、そのまま埋めもどしを行った。

また、現地に到着前（PL. 3 参照）に、石室の半分程はすでに長さ 2 m × 幅 0.8 m × 深さ 0.6 m 程掘り下げられ、石室の構築材と考えられる石もすでに取り上げられ、周囲に積んだ状況であった。（これらの石材は奥・側壁の腰石の上に使用されていたらしい）

石室の奥壁および側壁の一部が露出し、奥壁の腰石は機械で若干動かされ傾いているが、長さ 0.95 m、高さ 0.6 m、厚さ 0.2 m 程で、側壁の腰石は長さ 0.85 m × 幅 0.55 m × 厚さ 0.25 m と長さ 0.9 m × 幅 0.55 m × 厚さ 0.16 m やび同様な腰石の一部を含め 3 個確認された。

石室の規模は現状からは不明であるが、一側壁部の長さは 2.1 m 程である。また死床面と考えられる面に小礫の玉石を敷き詰めている状況が部分的に観察され、一部掘り上げられた玉石・土砂の中から須恵器片、鉄器片が採集され、人骨の一部が露出していた。

この古墳が発見される以前にも、ブルドーザーで削平しており、その前後に天井石等の一部が破壊された可能性が強い。

以上のような状況からして、この石室は石棺系石室の範中にに入るもので、時期・石室の全容、墳丘の存否についても今後の調査に期したい。
(註18) (註19)

4. おわりに

一野遺跡は縄文早期～後・晩期、弥生～奈良時代にかけての生活跡が営まれた複合遺跡である。また、弥生～古墳時代の時期に墓塚、石棺、石棺系石室等の墳墓が築かれた地域でもあり、隣接する妙法塚遺跡、景華園遺跡など、周辺の丘陵部先端部分にかけて同様な墳墓群が検出されている。

今回発見された石室は石棺系石室の範中に含まれると考えられる。

構築時期や墳丘の有無については今の所不明である。また、妙法塚遺跡においても同様な石室をもつ古墳があったとされるが詳細は不明である。

広範囲に分布する遺跡の中でも、墳墓域はほぼ限定されるようだが、同地域での開発行為が頻繁に行われ、結果として多くの遺構・遺物が十分な記録保存処置を得ずして破壊されたのは、この地域での墓制変遷を知る上でも、非常に残念なことである。

PLATES

III 一野遺跡



一野遺跡近景（石棺・漆棺墓出土地点）



一野遺跡（石室発見地点）



一野遺跡（南側）



一野遺跡（西側）



一野遺跡（石室の側壁部分）



一野遺跡（石室部分）



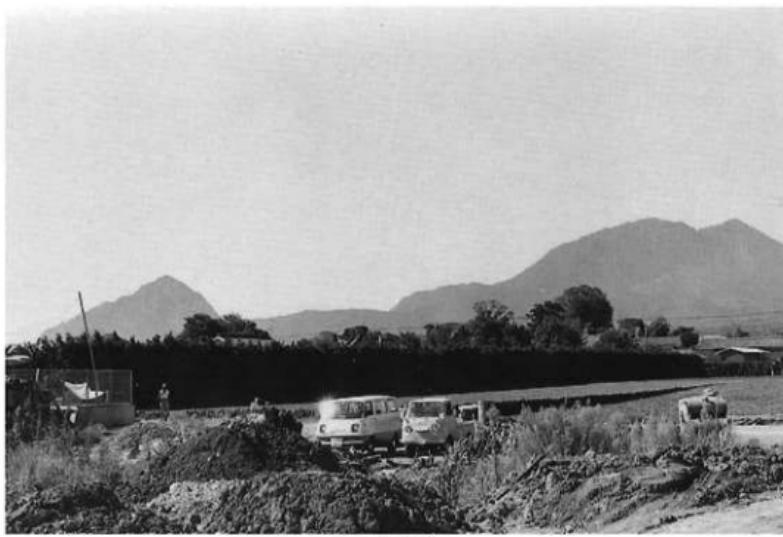
一野遺跡（人骨出土状況）



一野遺跡（石室発見状況）



小原下遺跡



中田遺跡



松尾遺跡



松尾遺跡調査風景



妙法塚遺跡（A地点）



景華園遺跡（島原市）

長崎県埋蔵文化財調査集報 X

昭和 62 年 3 月 31 日

発行 長崎県教育委員会

長崎市江戸町 2-13

印刷 (株) ニシキ印刷

長崎市平和町12-10